

第2章 京都大学病院構内A G16区の発掘調査

富井 眞 笹川尚紀

1 調査の概要

調査地点は京都大学病院東構内の西南部に位置し、聖護院川原町遺跡に含まれている(図版1-338)。ここに病棟の新設が計画されたため、発掘調査を2007年7月9日~11月26日に実施した。調査面積は3700㎡である。

近接地での既往の調査成果によれば、縄文時代に関しては、東方の191・278地点で自然河道跡から多量の後期の土器が出土しており、古代末期については、西方の39地点で護岸跡が検出されているほか278地点で瓦がまとまって出土している。そして中世以降は活動が著しく、本調査区を大きく取り巻くように、122・154・155・200a・278地点では中世の井戸や溝や土坑や集石が多数確認されているほか、近世になると、北に接する34地点などでも遺構が確認されるようになる。また、井戸や集石などのほかにも、154・155・278地点では砂取穴が、東方の141・240地点では池が、それぞれ検出されている。さらには、278地点からは、近世後半の乾山焼や蓮月焼などの遺物も多数出土している。

発掘調査の結果、現地表下1mにまで達している表土の下には、高野川系流路が供給した砂礫の厚い堆積があらわれるところも多く、とりわけ調査区の中央部分では遺物包含層は全く認められなかった。しかし、調査区の東辺および西半では表土下に近世の遺物包含層が残っており、畑境の段差・井戸・集石・溝・杭群など、農作業関連の遺構を検出した。また、調査区西半では土石流堆積層も確認している。中世以前については、遺物包含層は残存していなかったが、室町時代の井戸を検出した。出土遺物は、わずかに縄文・弥生土器を含むがほとんどは中近世の陶磁器類であり、整理箱で91箱を数える。

本章は、第1・3節を富井・笹川が、そのほかは富井が執筆した。

2 層位

調査区北辺及び南辺に広く深く攪乱が及んでいるので、南北方向の層位は包含層の厚い東辺の調査区東壁で、また、東西方向は南辺攪乱の北壁と攪乱を免れた調査区南壁東隅で、それぞれ断面観察をおこなった(図4~6)。

表土(第1層)は、機械掘削により除去した。調査区の東辺には、下部に明茶褐色の粘

京都大学病院構内A G16区の発掘調査



図4 近世II期の遺構と土層断面観察部の位置 縮尺1/500

層 位

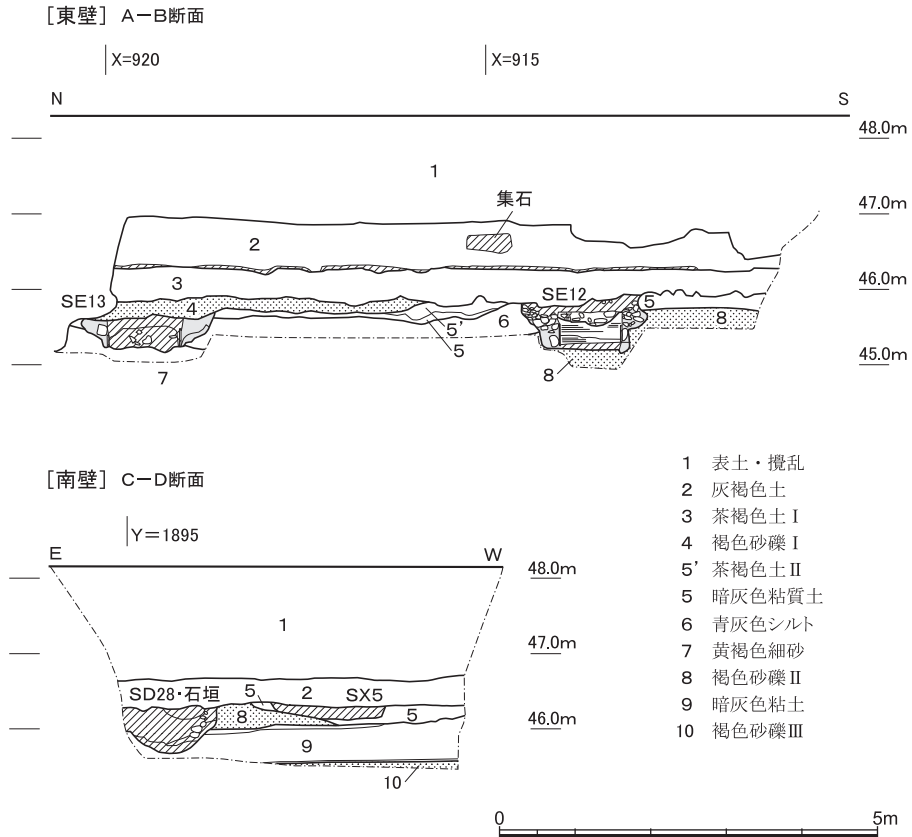


図5 東壁と南壁の層位 縮尺1/100

質土がありレンガなど明治期までの遺物を稀に包含していたが、中央から西辺にかけては明茶褐色土は見られず、表土を除去すると、中央では遺物包含層の下位の自然堆積層が現れ、西辺では灰褐色土（第2層）が分布している。

灰褐色土は19世紀の遺物包含層。東辺では、下半ほど粘性があつて色調も黒味を帯びていき、また、鉄分ないしマンガンの沈着と思われる褐色化した縞模様が断面に認められる。西辺では、やや砂質で粘性に乏しく、褐色化の縞模様も認められない。茶褐色土 I（第3層）は、江戸時代後期の遺物包含層で、東辺では、南北方向の段差がありその東側では、厚く堆積する。西辺では、X=920以南にしか分布せず、また、灰褐色土と同様に粘性に乏しい。灰褐色土と茶褐色土 I は、ともに、東壁付近に比べて西辺では堆積が薄い。

褐色砂礫 I（第4層）は東辺に分布する。粗砂を基質とし、約10cm大の頁岩等の堆積岩を多く含むが、堆積物の密度はあまり高くなく、ラミナも認められない。土石流堆積物が、

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

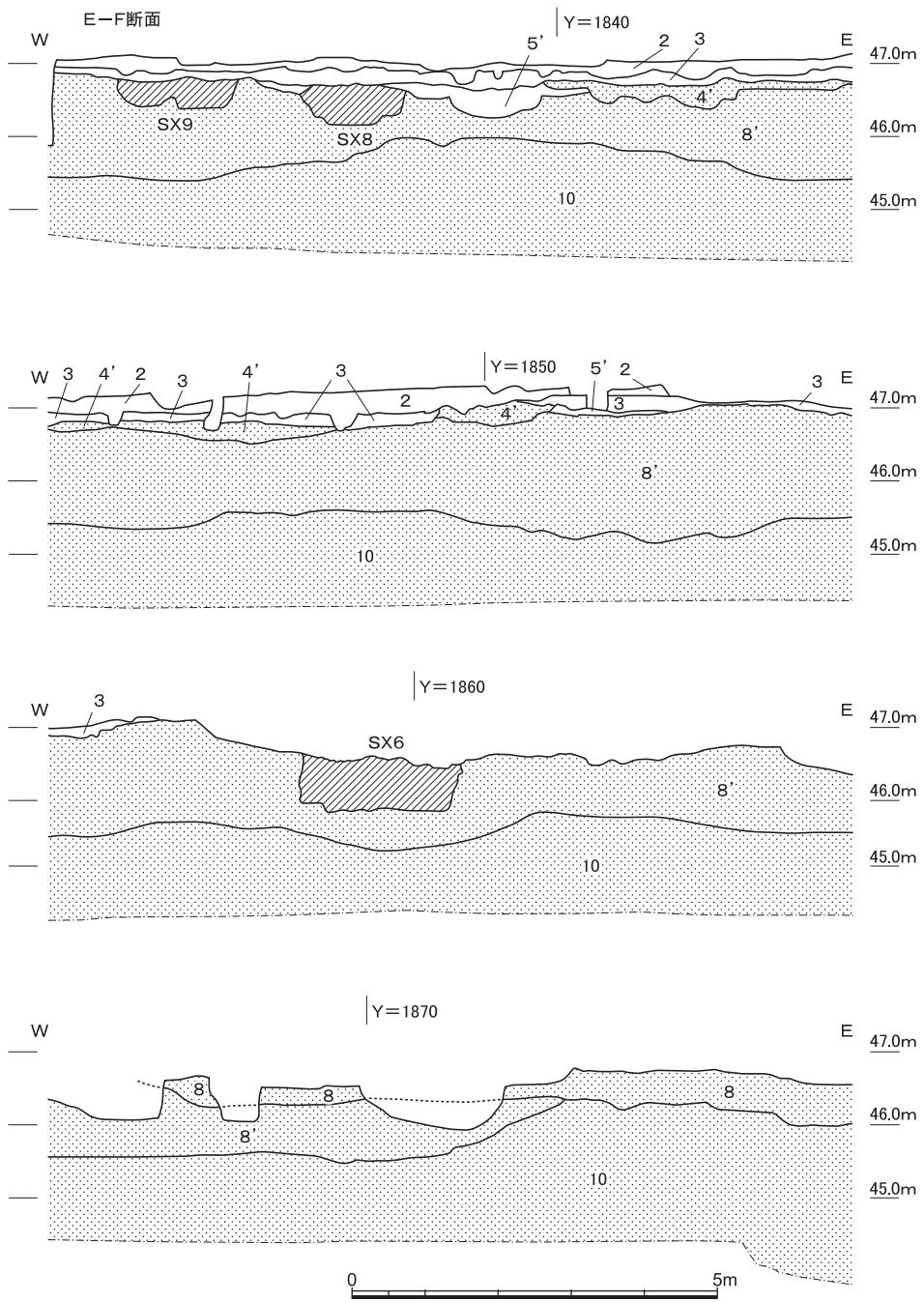


図6 南辺攪乱北壁の層位 縮尺1/100

層 位

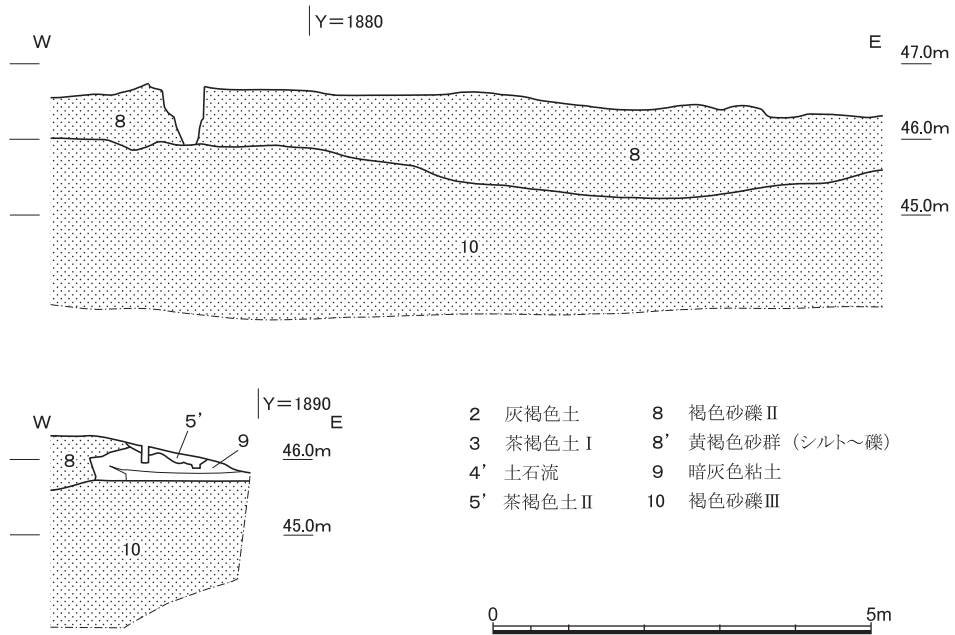


図6 つづき

後に攪拌を受けたと思われる。遺物は含まない。西辺でも、茶褐色土Ⅰの下位に同様の礫層が分布するが(第4'層)、それは、上方粗粒化している点、立った状態の礫が目立つ点、ラミナを認められない点から、土石流堆積でその堆積の状態を保っていると判断した。中世の土師器の細片が目立つが磁器染付もあり、18世紀後半と思われる。西辺の土石流堆積物の下位は、茶褐色土Ⅰと同様の地層であるが、茶褐色土Ⅱ(第5'層)とした。茶褐色土Ⅱは、遺物は少ないものの磁器染付が出土しており、茶褐色土Ⅰと同時期と考えられる。

調査区東辺の第4層の下位も第5'層としたが、色調は暗く、その下位の暗灰色粘質土(第5層)とあまり変わらない。調査区東辺の茶褐色土Ⅰを掘削中に検出した集石の下位には、本調査区のいずれの断面観察部にも分布していなかった褐色土が堆積しており、この褐色土の下位には、東壁でも確認された青灰色シルト(第6層)が堆積している。褐色土は、第5'層と第5層の中間の様相を帯びるが、18世紀ごろの遺物を包含する。暗灰色粘質土は、上部はやや砂質だが、基本的に砂や礫をほとんど含まない。面的に調査したときには遺物を確認できなかったが、東壁面で、1段撫で面取り手法のD類と、1段撫で手法のF類の土師器の口縁部片をそれぞれ1点ずつ確認した。このことから暗灰色粘質土の堆積は15～16世紀ごろと思われる。

青灰色シルト（第6層）以下は自然堆積層であるが、断面観察地点で確認された堆積物が調査区全面に同様に広がるわけではない。また、それらの自然堆積層の上面や、調査区内に多数存在する攪乱の壁面を中心に、遺物の確認に努めたが、後述する第8'層で2点確認できただけである。青灰色シルトは東辺に分布し、東側ほど青みが乏しくなる。基底部分は明茶褐色を呈し、また、上部は灰白色細砂が5cm厚で堆積している部分もある。黄褐色細砂（第7層）は、東辺の中央北側でしか確認できていない。

褐色砂礫Ⅱ（第8層）は、南壁では粗砂を基質として拳大の礫を含み、東壁では、粗砂を基質として上部に3cm程度までの堆積岩が多く認められ、南に行くにしたがって上面の標高が高くなっている。また、東壁では、北に堆積する第7層との先後関係を確認できていないが、北側ほど粒子が小さくなるので漸次的に第7層へ変化していると思われる。調査区南辺攪乱の北壁をみると、この褐色砂礫ⅡはY=1867あたりから西には分布しない。そして、Y=1873あたりから西には、褐色砂礫Ⅱの下位で、シルトから礫まで様々な碎屑物が含まれた層群が分布する。堆積岩粒がかなり目立つこの層群を、便宜的に黄褐色砂群とした（第8'層）。

黄褐色砂群は、多くのレンズ状堆積などから成るが、西に行くほど単位が小さく、基本的に堆積が新しい。氾濫原が時間とともに西方へ進んでいったことがわかる。この層からは、遺物を2点確認できた。一つは、調査区南辺攪乱北壁でS X 6直下の粗砂層から出土した、10mm以下の土師器細片である。古代ないし中世のものと思われる。もう一つは、調査区北辺攪乱南壁からであるが、調査区西壁付近の細砂層から出土した、磨滅した縄文時代中期初頭の鷹鳥式の口縁部片である（Ⅱ2）。以上から、黄褐色砂群は、基本的に古代ないし中世の堆積物と考えられる。なお、黄褐色砂群には、白川起源と思われる花崗岩粒が高組成比を示すような堆積の単位を認めることはできなかった。

黄褐色砂群のもっとも残りの良い部分は、調査区中央付近で、標高は47mを超える。これは、調査区西辺では茶褐色土上面に匹敵し、東辺では灰褐色土上面に等しい。中世以降の削平を考慮するにしても、調査区中央付近が、高野川系流路に由来する砂がもっとも厚く堆積していたことがうかがえる。

暗灰色粘土（第9層）は、調査区東南部にしか分布しない。緻密で非常に堅く、基底部分あたりの約10cm厚は茶褐色を呈する。南辺攪乱北壁の東端付近では、褐色砂礫Ⅱに浸食されているのが確認でき、また、色調は青みが強い。南壁では、上部と下部の数cmは茶褐色を呈する。褐色砂礫Ⅲ（第10層）は、数cmから人頭大までの大きさのチャートなどの堆積

遺 構

岩を多く含む。礫の並び方や最上部の褐色化によって、上位の褐色砂礫Ⅱや黄褐色砂とは識別できる。また、北辺攪乱南壁でも同様の礫層が広く厚く堆積しているのが確認でき、調査区全域に分布していたと思われる。増田富士雄氏から、高野川の河床礫とのご教示を得た。人頭大の礫は、南辺攪乱北壁ではY = 1857あたりから西の、掘削深度の最下部に多く見られる。

3 遺 構

(1) 中世の遺構（図版2・3，図7～11）

検出された中世の遺構は石組みの井戸6基のみで、いずれも上部を著しく削平されている。SE3は（図版3-1，図8），調査区中央で検出した15～16世紀の井戸。木桶の遺存状態は悪かったが、1段分の木質は確認できた。その木桶の最下部と同程度の標高で、井筒底面は地山に達するので、この木組みが水溜となっていたと思われる。井戸底の標高は45.4m。石組みは、残存している限りでは、中段と最上段に一辺30cmを超える大型の石を数個用いているが、主体は最大長30cm前後の川原石で、そのうち花崗岩は10点に満たない。また、大型の石の配置には、平面プランの面でも地山の堆積物の粒径の面でも、特別な配慮があったとは思えない。木桶の裏込めは、四辺とも、井筒の石組みに用いた石と同程度のサイズの石を用い、井筒に近い内側の石は基本的に平坦面を内側に向けて木桶と接する面積を多く取っている。しかし、井筒の石組みとは異なりその石自体には裏込めの小石はない。なお、地山は均質でなく、幾重にもシルトから粗砂までの自然堆積層が堆積している。

SE6は（図版3-2，図9），調査区西辺で検出した15～16世紀の井戸で、木桶の遺存状態は悪く、木質は1段しか確認できなかったが、埋土の状況から2段の方形木組みがあったと判断でき、水溜には円筒形の木桶が3段あったと思われ、わずかに針葉樹の縦板と思われる木質が確認できた。井戸底の標高は44.3m。石組みは、最下段の四隅に長軸50cmを超える大型の石を用いており、それ以外は最大長30cm前後の石が主体となる。大型の石も含め、花崗岩の利用が多く、残存している限りでも4分の3以上である。木桶には、方形木組みでは、四辺とも裏込めには基本的に石を用いてはいるが、円筒形の木桶が据えられていたと思われる円筒形の水溜部では、掘方に沿うように厚さ2、3cmの灰白色粘土が塗り巡らされていた。なお、地山は基本的に10cm大の礫を含む砂礫で、木桶部の深さでも1cm大の礫を含む砂礫で、シルトや粘土の堆積は見られない。

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

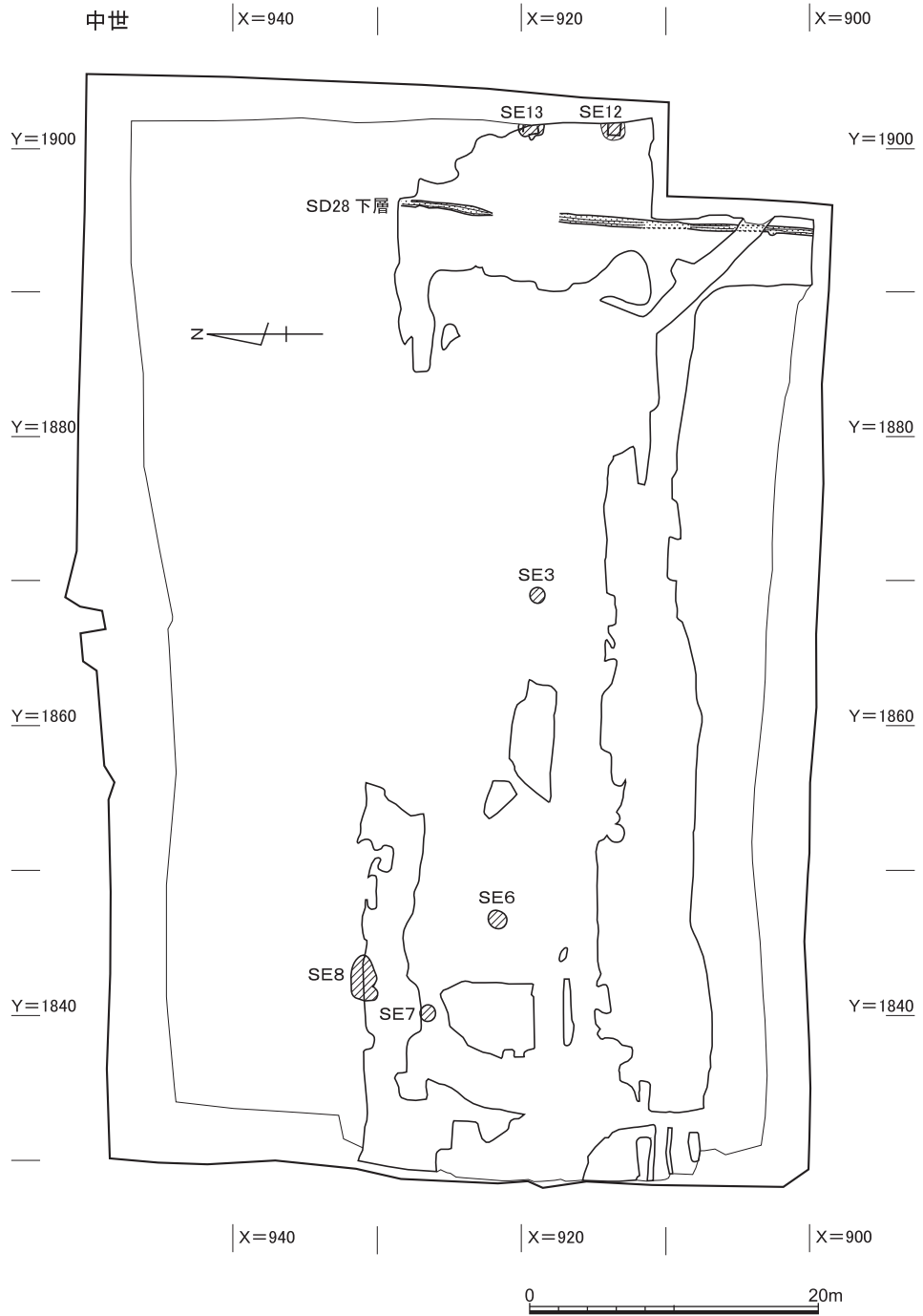


図7 中世の遺構 縮尺1/500

遺 構

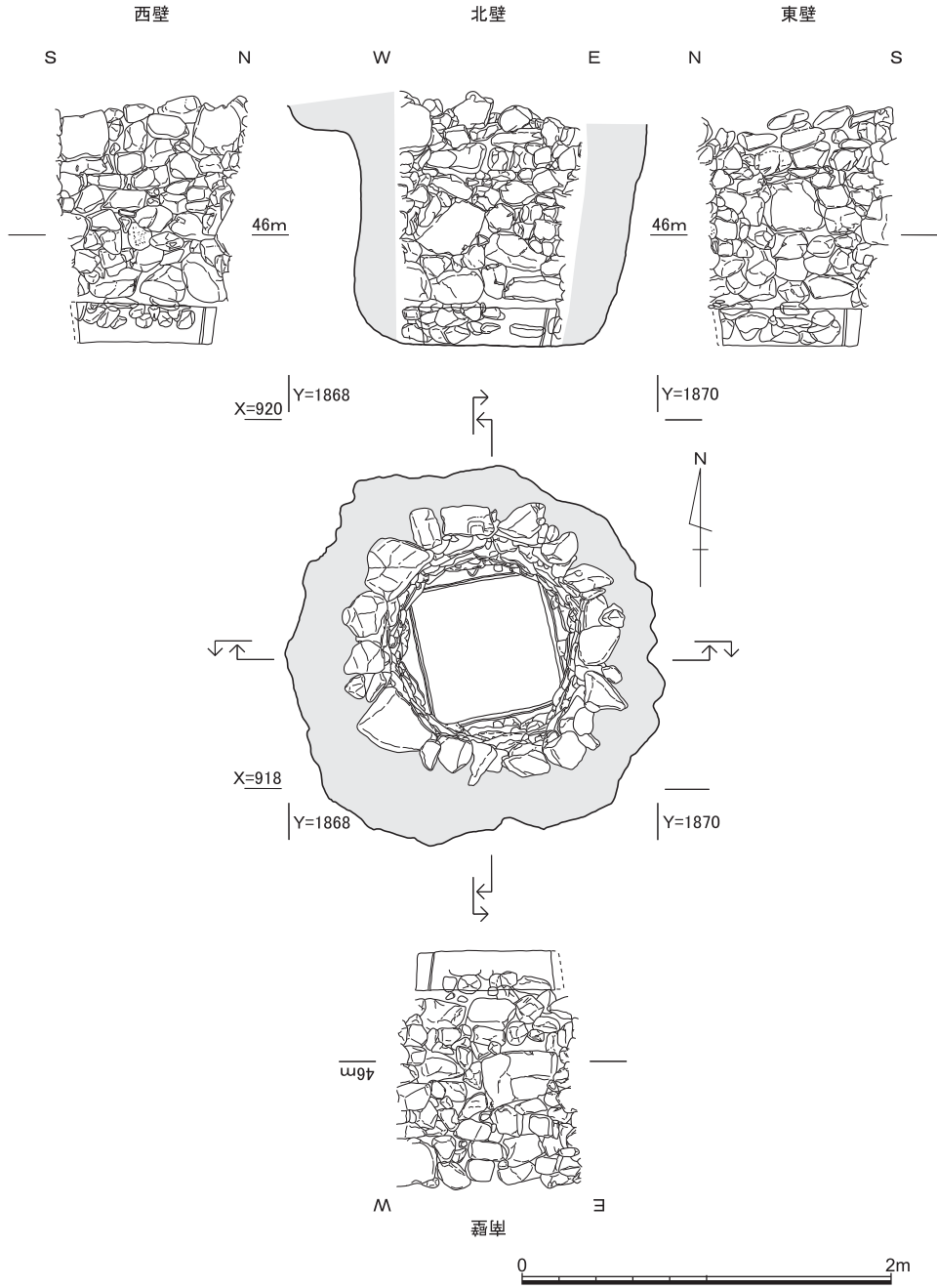


図8 井戸SE3 縮尺1/40

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

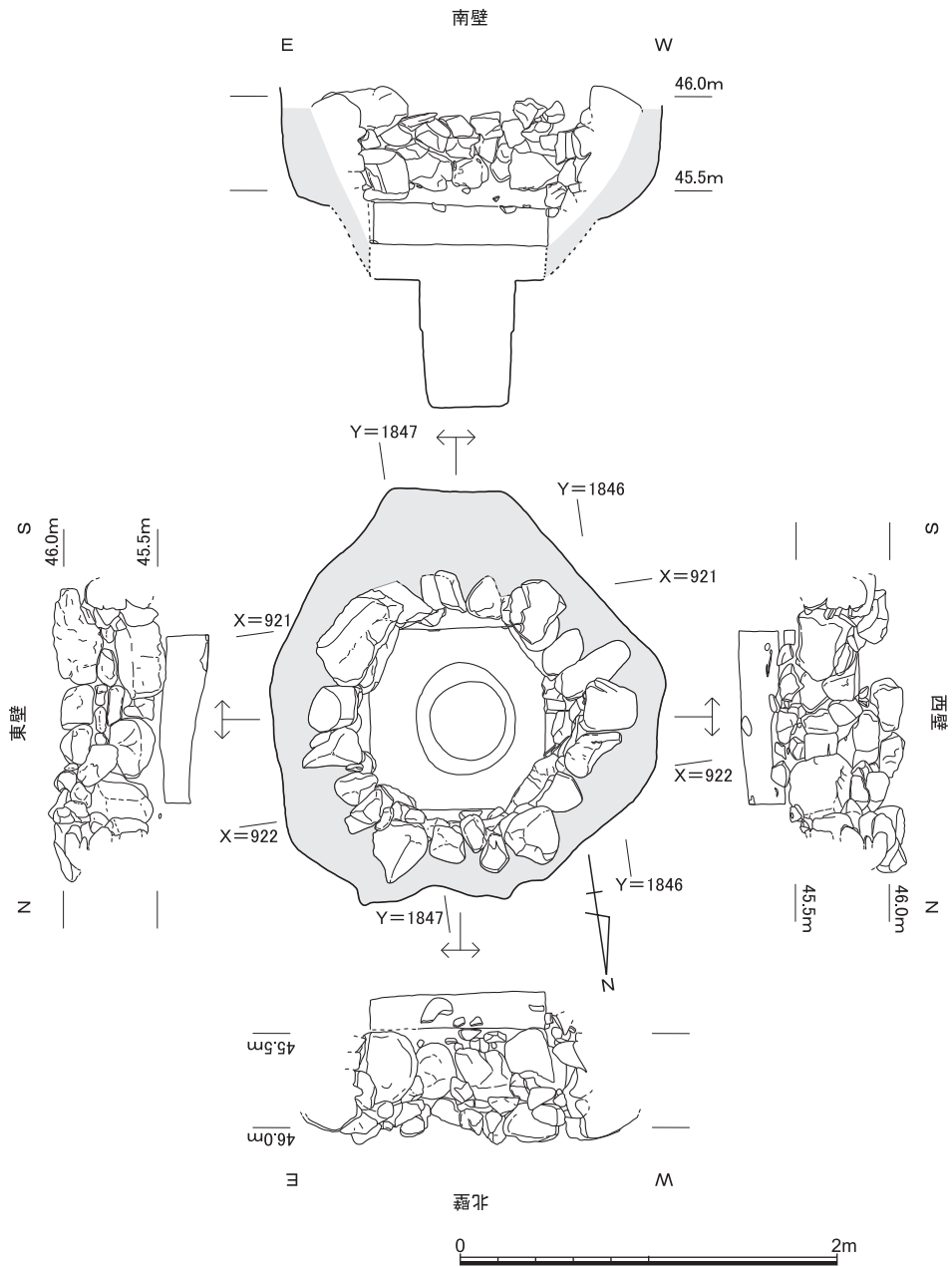


図9 井戸SE 6 縮尺1/40

遺 構

SE7は(図版3-3, 図10), SE6から10m北西で検出した15~16世紀の井戸で, 木桶の遺存状態が悪く, 木質を確認できなかったが, 埋土の状況から1段の方形木組みがあったと判断できた。方形木組みの最下部中央に浅い円筒形の窪みを確認できたので, この窪みには桶が置かれていたのかもしれない。井戸底の標高は45.2m。石組みは, 最大長30cm前後の石が主体となる。花崗岩の利用が顕著で, 残存している限りでも4分の3以上を占める。木桶には, 南面を除く3辺には基本的に石を用いない。

SE8は(図版3-4, 図11), 調査区西辺で検出した14世紀の井戸で, 井戸底の標高は44.5m。当初は近世の不整形の落ち込みと思われたが, 中世の遺物が目立ち始めた頃に石組みの残存を確認できた。遺存している石組みや木桶の痕跡からすると, 当初は井戸底が44.5mだったものが, 井筒の急速な埋積によって, 標高45.2m前後に水溜をもつ石組み井戸に再構築されたのかもしれない。上部の石組みに残存している石は, 長軸30cm前後の大きめのものが目立つ。

SE12(図版3-5)とSE13は, 東壁で確認した井戸で(図5), どちらも上部を完全に破壊されていて, 平面プランを検出するまでに, 石組みや裏込めを構成していたと思われる大きな礫を全く確認できなかった。SE13の上部には, 褐色砂礫Iが堆積している。井戸底の標高は, ともに45.1m。15~16世紀ごろの堆積と考えられる暗灰色粘質土を切っているが, 出土遺物との間に大きな時期差はなく, どちらの井戸にも15~16世紀の年代を与えられる。SE12・13ともに, 井筒の石組みはほとんど残っていないが, 木桶の木質の遺存状態が比較的よく, どちらも横板組1段だった。そのうち, SE12では横板の組み方がわかる。東の辺の板材は, 両短辺とも端部の下半に切り込みをいれてあり, 南の辺と北の辺の板材は, それに対応するように, 東側の短辺の上半に切り込みを入れて, 隅で組み合うようになっている。

(2) 近世の遺構(図版2~4, 図4・12・13)

近世の遺構は, 灰褐色土の掘削中および掘削後の茶褐色土上面で確認できる遺構と, 茶褐色土の掘削中および掘削後に確認できる遺構がある。灰褐色土を埋土とする遺構は19世紀で, 茶褐色土の掘削中ないし掘削後に検出した遺構は18世紀までの遺物しか含まれない。18世紀までを近世I期とし, 19世紀以降を近世II期とする。

調査区西辺のY=1850付近では, 西に落ちる段差を確認している。近世I期にもII期にも存在しており, さらに, 褐色砂礫II・黄褐色砂の上面の標高をおよそ踏襲している。

近世I期の遺構 調査区東辺で検出されたSD28は(図版3-6), 南北方向の石垣の

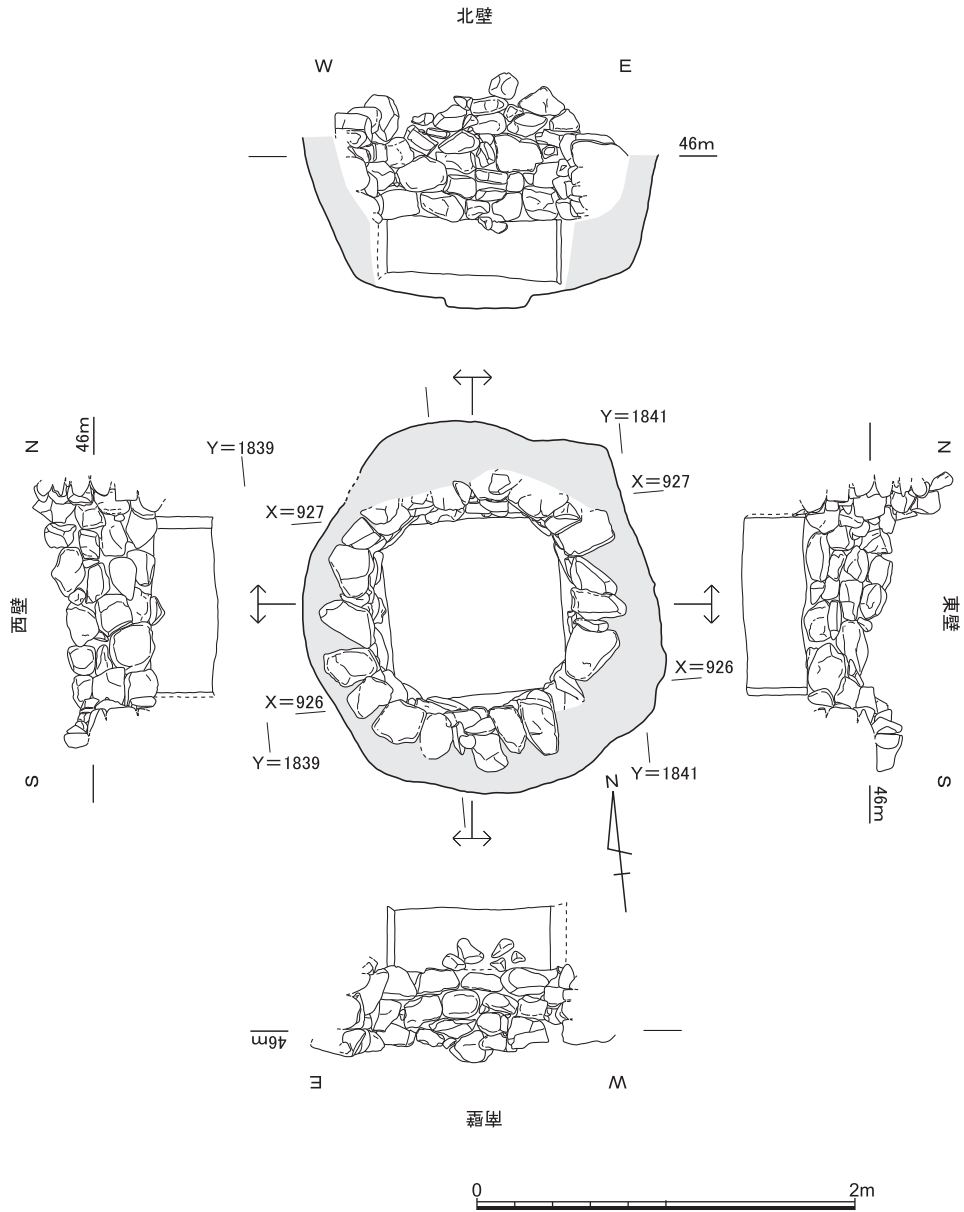


図10 井戸SE7 縮尺1/40

遺 構

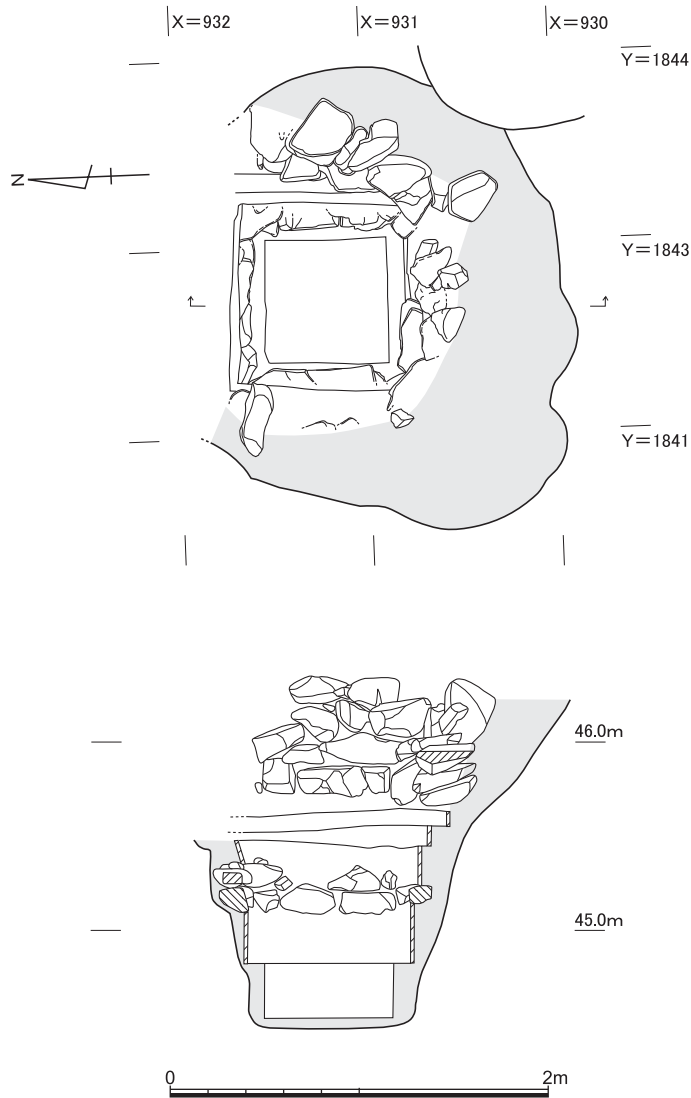


図11 井戸SE 8 縮尺1/40

段差下を石垣に並行して走る溝で、西肩の石垣は石を6段以上組み上げている。S D28と石垣から出土した遺物は、微量で破片も小さいが、S D28埋土からは京焼の椀の底部付近が出土しており、石垣の目地や裏込からは、直立ないし内湾気味に立ち上がる陶器椀や、呉須がくすんだ水色の染付破片が出土しているので、どちらも18世紀の遺構と判断する。S D28下部は拳大集石や石垣の下位の溝で、近世の遺物がわずかに含まれるが、年代を特

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

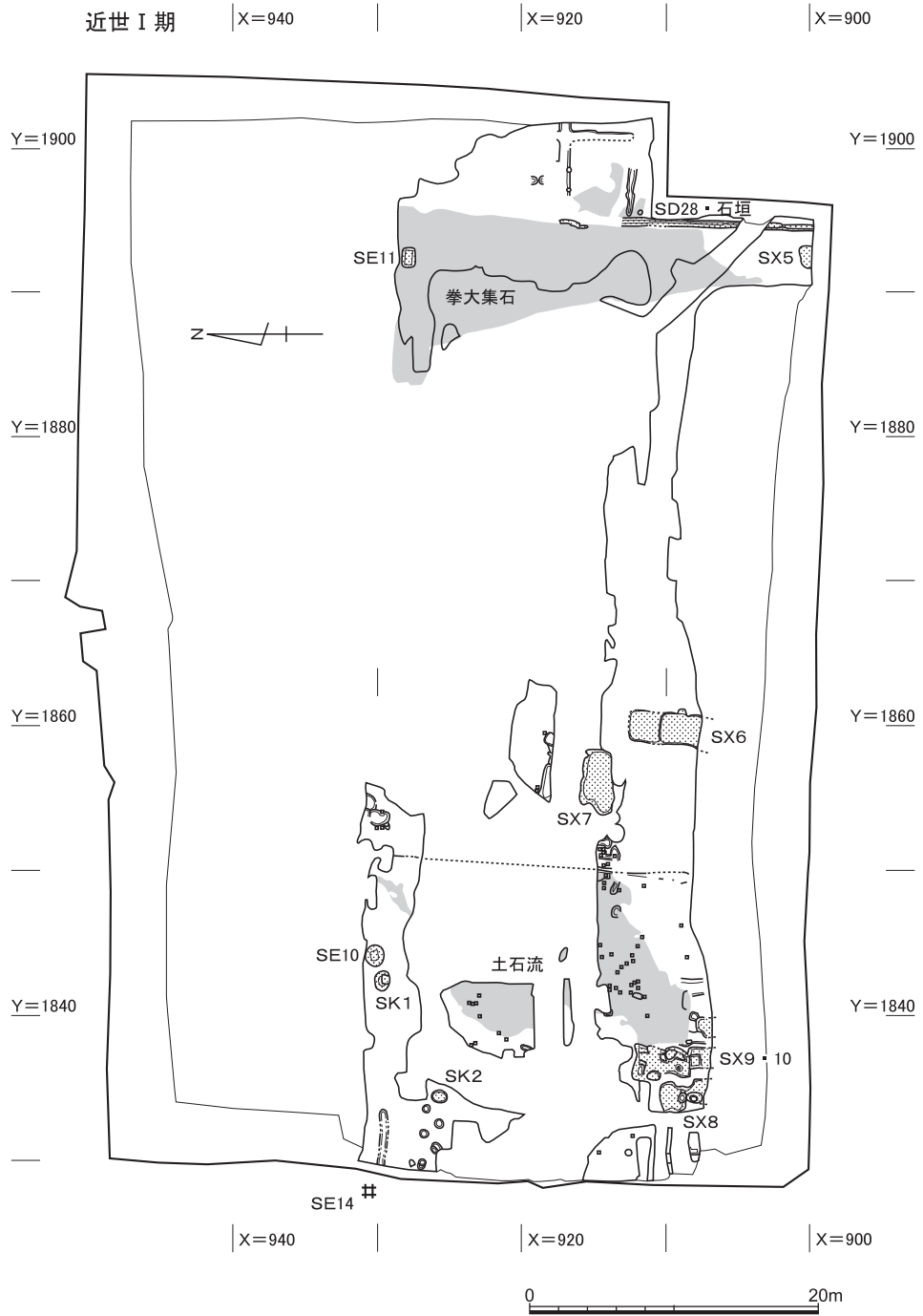


図12 近世 I 期の遺構 縮尺1/500

遺 構

定できず、18世紀以前としか言えない。便宜的に図7に示した。

S X 5は、東南隅の南壁際で灰褐色土最下部で上面を確認した、調査区南方へと続いていく方形プランの集石遺構の北端部。比較的密に集められた礫の大きさは、大半が10cm未満。出土遺物が少ないが、19世紀には下らないと思われる磁器染付が出土している。

調査区東辺に広く分布する拳大集石は（図版2-2）、茶褐色土の掘削中に確認された。明瞭なプランも堀方も持たず、礫どうしが密着しているわけではない。礫の大きさとしては、10~20cm大のものが目立つ。S D 28の西肩となっている石垣の西側段差上、すなわち石列の西側に分布の中心がある。S D 28より東側にも散漫な分布があるが、これは西側から崩れてきたものと思われる。石垣との年代的关系はわからないが、両者に見られる礫のサイズが同様であり、同時と見なすこともできよう。拳大集石の下位には褐色土が堆積している。染付を含み、18世紀ごろの堆積と思われる。褐色土の下位には青灰色シルト、明茶褐色シルトと無遺物の自然堆積層が続く。

S E 11は（図版4-1）、拳大集石の下位で検出された木組み遺構。井戸の可能性を考慮して調査したが、明確な水溜を確認できなかった。木組みが長方形を呈するので、井戸ではないと判断する。裏込めから碁笥状の底部をもつ磁器染付の皿の破片が出土し、木組み内からも17世紀頃と思われる陶器鉢が出土する。

調査区西半に分布する集石S X 6~10は、拳大集石とは少し異なる集石。まず、礫が少し小ぶり、大きくても10cm程度におさまるものが多く、また、堀方は矩形で、立ち上がる壁も急角度である。とりわけ地山にシルトが広く堆積しているS X 6・7では（図版4-2・3）、壁は垂直ないしオーバーハング気味に立ち上がり、基底面もおおよそ平坦になる。また、この両者では、礫どうしが密着している。S X 6は底面の段差や平面形状から、2基の集石土坑が複合していることがわかる。礫の間に黒褐色の砂が多く混じるS X 8~10は、平面規模も礫のサイズも小さく、遺物もほとんど出土しない。規模も含有礫も大きいS X 6・7には遺物も含まれ、その中では、土器底部や瓦のように厚みのある破片が特に多い。これらの集石からの出土遺物は、多くが中世以前のものだが、細片の中には近世の陶磁器が含まれる。

S E 10は（図版4-4、図13）、調査区西辺で検出した18世紀の石組みの井戸。石組みは、もっともよく遺存している部分で、15段程度を確認できる。井筒を構成する石の主体は、最大長20cm程度の堆積岩である。井戸底の標高は、45.0m。なお、地山は基本的に3~5cm大の礫を含む砂礫で、シルトや粘土の堆積は見られない。

SE14は、調査区西壁の西の立合調査で検出した18世紀の石組み井戸。SE10のほぼ真西約15mのあたりだが、正確な位置や井戸底の標高を記録できなかった。地山は、SE10周辺と同様で、基本的に5cm大の礫を含む砂礫で、シルトや粘土の堆積は見られない。

SK1・2は、近世の土坑。SE10に近接するSK1は、18世紀ごろの陶磁器類の廃棄土坑。SK1の南西10mあたりに位置するSK2は（図版4-5）、直径50cmほどの土坑で、北半は集石で、南半からは3点のみの遺物が出土したが、いずれも1/2近く残存している。やや特殊な廃棄土坑と判断する。この土坑も18世紀ごろと思われる。

Y=1850付近を南北にはしる段差西側では、南側攪乱の北側で、茶褐色土IIを除去すると複数の不整形の落ち込みを確認できた。いずれも出土遺物の主体は中世だがわずかに近世の陶磁器も含まれる。近世の自然の落ち込みと思われる。同様に、調査区東壁付近の茶褐色土IIの下部でも北東方向への落ち込みを確認でき、埋土からは中世の土師器や備前焼すり鉢が出土しているが、これも層位的に、近世I期の自然の落ち込みと判断した。

近世II期の遺構 一辺15~30cm前後の方形ピットは調査区西辺でも東辺でも同様に認められる。このほか、調査区東辺では、平面形が長楕円や三角形を呈する鋤痕のような浅いピットや、甲子目状に連なる浅い溝群が認められたのに対し、西辺では、短冊状の浅い溝列や不整形の土坑が認められる。

灰褐色土の掘削中には、調査区東壁際のX=910~920にかけて、1㎡前後の広がりをもつ、方形プランの集石が4基検出されている。いずれも礫の大きさはほとんど10cm未満で

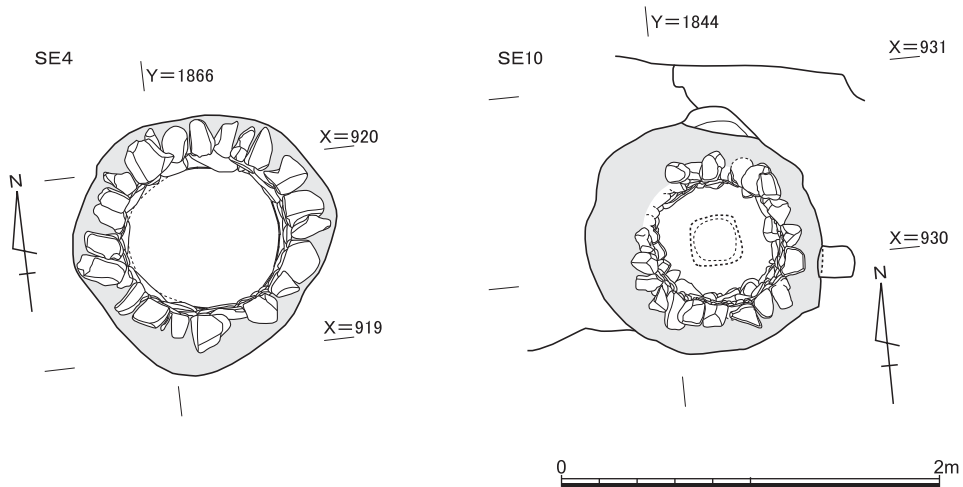


図13 井戸SE4・10 縮尺1/40

遺 構

ある。これらの集石の下位には、南北方向に溝SD2がはしる。SD2の約10m西にも、灰褐色土の掘削中に、南北方向の溝SD1が検出された。SD1とSD2の間をはしるSD3は、近世I期のSD28を踏襲した溝。この段階では近世I期の石垣もほとんど埋没しており、埋土も、最下部に白色細砂を認めるが基本的に灰褐色土である。出土遺物はほとんどないが、層的に19世紀と判断する。

SE1は、調査区東辺で検出した井戸で、漆喰を井筒に用いる。井戸底の標高は44.8m。井筒は、上部を削平されていて50cmほどしか残存していない。下部の木桶は2段と判断されるが、木質は下段の一部で針葉樹の縦板が確認されたのみである。埋土から大量の棧瓦が出土したが、漆喰下端近くから木桶上端近くにかけては遺物をほとんど含まない。井筒の埋土は、明茶褐色土に相当する。19世紀の遺構と判断するが、埋没し終わるのは明治以降であろう。

SE2も、調査区東辺で検出した、漆喰を井筒に用いる井戸で、井戸底は標高44.3m。木桶は、木質が腐朽していて確認できないが、井戸底から漆喰下端までは約50cmあるので、SE1と同様ならば2段かもしれない。木桶内からは、陶器杯と寛永通宝が出土している。井筒の最上部には拳大から人頭大の礫が巡るが、それ以上は削平を受けていると思われる。漆喰は完存していて、およそ2mをはかる。井筒の中央付近には10cm程度の礫が散見できるので、継ぎ目があったのかもしれない。井筒の埋土は下部付近まで明茶褐色土だった。遺物はほとんど出土していない。19世紀の遺構と判断するが、埋没し終わるのは明治以降であろう。なお、SE2の西側には漆喰製の野壺の残骸が認められたが、輪郭は判然としなかった。

SE4は（図版4-6、図13）、調査区中央で検出した近世の石組みの井戸。石組みは大半が堆積岩から成るが、上部を削平されており、7段程度しか残存していない。石組みの最下段は、最大で幅約30cm長さ約50cm程度の花崗岩11個が巡り、その直下には幅約10cm長さ約60cmの針葉樹板材を巡らせた木桶が確認できた。石組みの下部付近から完形の植木鉢や磁器椀が出土したが、井筒の中位からレンガが出土している。19世紀に構築されたと判断するが、埋没し終わるのは明治以降である。井戸底の標高は43.5mで、東に近接する中世の井戸SE3の井戸底よりもおよそ2m低い。地山を確認できたのは、大型の花崗岩の段までの標高44.7m付近までだが、5cm大の礫を含む砂礫が一様に堆積していて、シルトや粘土の堆積は見られない。

4 遺 物

本調査区からは縄文～近世の遺物が出土したが、主体は中近世の土師器・陶磁器である。

(1) 縄文～古墳時代の遺物 (図14)

Ⅱ 1～Ⅱ 5は縄文土器で、Ⅱ 2が第8'層から出土しているほかは、いずれも近世以降の遺構や包含層などから出土した。Ⅱ 1は、北白川下層Ⅱ式で、土石流堆積層から回収された。破断面は磨滅しているが、器表面はほとんど磨滅していない。単節のR L縄文を横位施文した後に、C字爪形文を施す。淡橙色を呈し、肉眼では角閃石を確認できなかった。Ⅱ 2は、鷹島式で、北側の攪乱の南壁の細砂層(第8'層)を南に掘り進めたときに回収された。器表面も破断面も磨滅している。Ⅱ 3は船元式前半期の頸胴部の屈曲部破片で縦長のC字爪形文が施されている。直角に開く屈曲部外面には、焼成後の粘土の剝落が認められ、爪形文を施す前に外面から補強のために粘土が付加されていることがわかる。Ⅱ 4

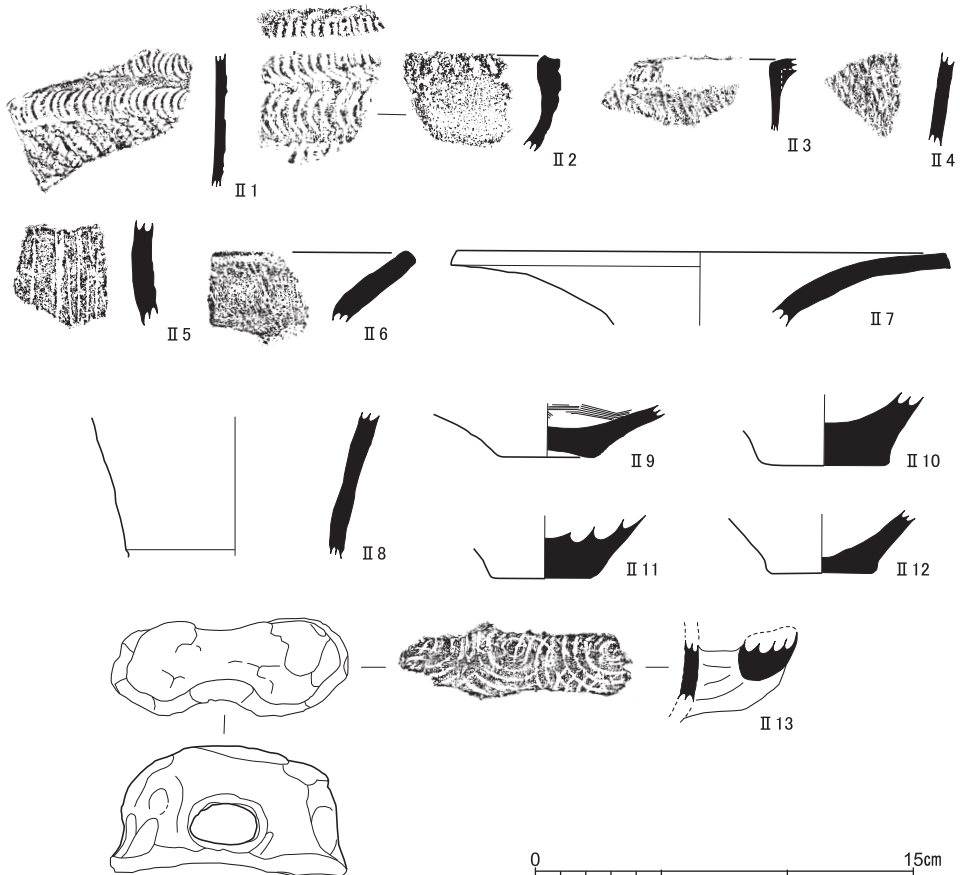


図14 縄文～古墳時代の遺物 (Ⅱ 1～Ⅱ 6縄文土器, Ⅱ 7～Ⅱ 12弥生土器, Ⅱ 13須恵器) 縮尺1/3

遺 物

は船元式前半期の胴部破片。Ⅱ 5は北白川上層式2期の頸部破片。角閃石を含む。

Ⅱ 6～Ⅱ 12は弥生土器。いずれも近世の集石SX 6～8から出土している。Ⅱ 6は前期の壺の口縁部で、外面には刷毛目が認められる。淡橙色を呈し、胎土にはクサリ礫や茶色チャート粒を含む。Ⅱ 7は後期の壺の口縁部。内外面とも縦位の磨き。Ⅱ 8は、中期の壺の頸部と思われるが、磨減が著しい。最下部に沈線が認められる。Ⅱ 9は後期の底部。内面には横位の刷毛目を確認できる。Ⅱ 10～Ⅱ 12の底部は、前期から中期にかけてのものと思われる。Ⅱ 13は古墳時代の須恵器甕の把手。中世の井戸SE 8から出土した。

(2) 中世遺構の出土遺物 (図15・16)

SE 3 出土遺物 (Ⅱ 14～Ⅱ 19) Ⅱ 14～Ⅱ 18は、土師器皿。いずれも1段撫で手法のF類。Ⅱ 14・Ⅱ 17・Ⅱ 18はF₂類と思われる。Ⅱ 14・Ⅱ 15はF₃類。Ⅱ 19は陶器で、壺ないし大皿の底部と思われる。外面は淡桃色を呈して削りの痕跡を残し、内面は明るめの鉄釉の上に白色釉。この遺構からはこのほかに小片で、瓦器の盤と羽釜、外面に叩きの痕跡を確認できないほどに最終調整を施している丸瓦などが出土している。また、遺構の帰属年代よりは古い時期の製品と思われるものの、本調査区では希少な、東播系須恵器のすり鉢も出土している。遺構の帰属時期は、15～16世紀と判断する。

SE 6 出土遺物 (Ⅱ 20～Ⅱ 28) Ⅱ 20～Ⅱ 27は、土師器皿で、Ⅱ 25がほぼ完形のほかは、いずれも小破片である。Ⅱ 20・Ⅱ 21は1段撫で素縁手法で、Ⅱ 20はE₂類でⅡ 21がE₄類。Ⅱ 22～Ⅱ 27は1段撫で手法のF類。Ⅱ 22・Ⅱ 26・Ⅱ 27はF₃類、Ⅱ 24はF₁類、Ⅱ 23・Ⅱ 25はF₂類。Ⅱ 28は巴文軒丸瓦。丸瓦との接合部から剝離しており、また表面が磨滅している。この遺構からの出土遺物では瓦の破片が非常に少ないにもかかわらず、この軒丸瓦は、瓦当部に占める破損面積が小さいので、特殊な意図の反映された遺物かもしれない。この遺構からはこのほかに小片で、古瀬戸皿、白磁碗、すり鉢と思われる備前陶器などが出土している。遺構の帰属時期は、15～16世紀と判断する。

SE 7 出土遺物 (Ⅱ 29～Ⅱ 34) Ⅱ 29～Ⅱ 34は、いずれも1段撫で手法のF類の土師器皿。Ⅱ 15が1/2以上残存するほかはいずれも遺存率の低い破片である。Ⅱ 31がF₁類で、そのほかはF₂類。この遺構からはこのほかに小片で、瓦器の火鉢や羽釜脚部、備前すり鉢、筒部に焼成前穿孔のある丸瓦、破損後に被熱したと思われる滑石製石鍋などが出土している。遺構の帰属時期は、15～16世紀と判断する。

SE 8 出土遺物 (Ⅱ 35～Ⅱ 53) Ⅱ 35～Ⅱ 44は土師器皿。Ⅱ 35～Ⅱ 37は受け皿。Ⅱ 38～40・43は1段撫で面取り手法で、Ⅱ 38はD₃類、Ⅱ 39・40はD₅類、Ⅱ 43はD₂類。Ⅱ 41・

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

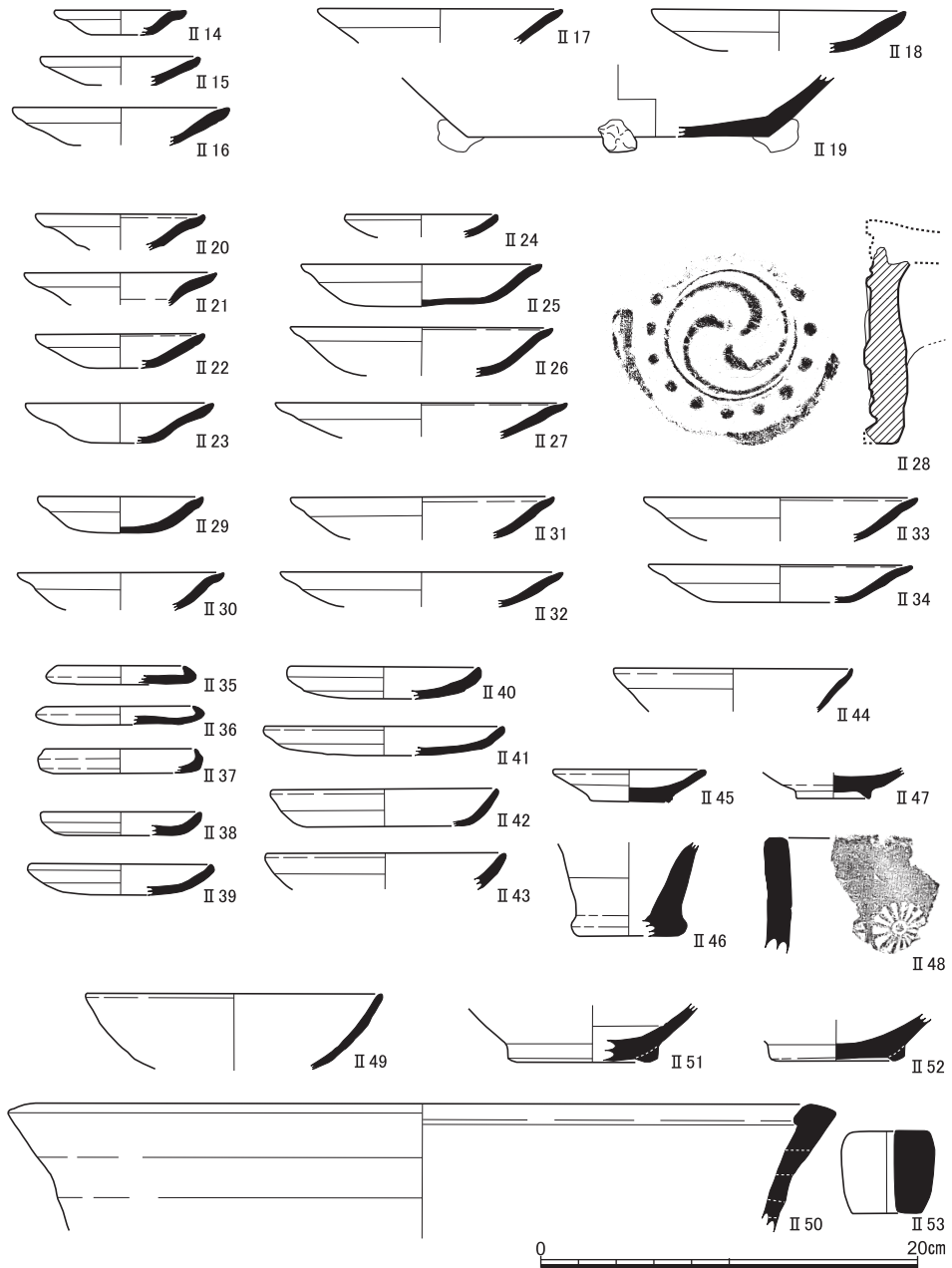


図15 SE 3 出土遺物 (II14~II18土師器, II19陶器), SE 6 出土遺物 (II20~II27土師器, II28軒丸瓦), SE 7 出土遺物 (II29~II34土師器), SE 8 出土遺物 (II35~II46土師器, II47灰釉系陶器, II48~II50瓦器, II51・52白磁, II53土製品)

遺 物

42・44は1段撫で素縁手法で、Ⅱ41・42はE₁類で、灰白色を呈するⅡ44はE₂類。Ⅱ45はロクロ土師器で、底面に糸切り痕がある。Ⅱ46は灰白色を呈する土師器高杯。Ⅱ47は灰釉系陶器で磨滅が著しい。Ⅱ48～Ⅱ50は瓦器で、火鉢と椀と盤。Ⅱ51・Ⅱ52は白磁の底部。Ⅱ53は土製品で、中脹れで寸胴の円柱の中軸に貫通孔がある。遺構の帰属時期は、14世紀と判断する。なお、この遺構からは、本調査区の中では比較的まとまって瓦片が出土しており、それについては項をあらためて後述する。

SE12出土遺物（Ⅱ54～Ⅱ58） Ⅱ54・Ⅱ55は、いずれも1段撫で素縁手法の土師器皿で、ともにE₂類。Ⅱ56は古瀬戸の底部。Ⅱ57の信楽の大甕は15世紀前半頃に帰属しよう。Ⅱ58は白磁椀。遺構の帰属時期は、15～16世紀と判断する。

SE13出土遺物（Ⅱ59～Ⅱ63） Ⅱ59～Ⅱ61は土師器皿。Ⅱ59は1段撫で素縁手法のE₂類で、Ⅱ60・Ⅱ61は1段撫で手法のF₃類。Ⅱ62は白磁の底部。Ⅱ63は瓦器の鍋で、口縁上端に凸線と珠点が巡る。このほかに、外面に叩きの痕跡を確認できないほどに最終調整を施している丸瓦も出土している。遺構の帰属時期は、15～16世紀と判断する。

(3) SE8出土の瓦（図版5～7、図17～21）

破片はコンテナに詰め込めば2箱分だが、軒瓦の比率が高い。軒丸瓦は32点出土し、そのうち、瓦当面が残っているものは16点で、そのほかは剝離した丸瓦部のみが残る。軒平瓦は24点出土し、そのうち、瓦当面が残っているものは22点で、そのほかは剝離した平瓦部のみが残る。

軒丸瓦 Ⅱ67・Ⅱ77は、SE8の上部から出土した。Ⅱ64は複弁蓮華文。軟質で灰色を呈する。Ⅱ65も蓮華文と思われる。淡橙色を呈し、胎土にクサリ礫が目立つ。Ⅱ66は、全体の意匠を読み取りにくいのが、内区と外区に分かれているようで、内区には巴文があると思われる。外区にあるのは変容した唐草文であろうか。瓦当外周は縄叩きで、裏面には指押しをしたような凹凸がある。黄灰色を呈する。Ⅱ67～Ⅱ69は、外区に珠点をもたない巴文。Ⅱ67とⅡ68は、黒灰色を呈し、瓦当内面には指頭圧痕が多く認められ、外周は指で撫でている。Ⅱ67の丸瓦接合部の剝離部分では、丸瓦凹面との接着部には布目が反転して転写されているが、丸瓦端面との接着部は平滑である。また、凹面との接着の補強では、指を反時計回りに動かしながら粘土を当てて密着を図っている。Ⅱ69は、淡橙色を呈し、胎土にクサリ礫が目立つ。

Ⅱ70～Ⅱ77は外区に珠点をもつ巴文。Ⅱ70・Ⅱ73・Ⅱ76は、黒灰色を呈して、外周は平滑に面をとってある。Ⅱ70・Ⅱ76の瓦当内面には指をそろえた掌の圧痕があり、Ⅱ73も同

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

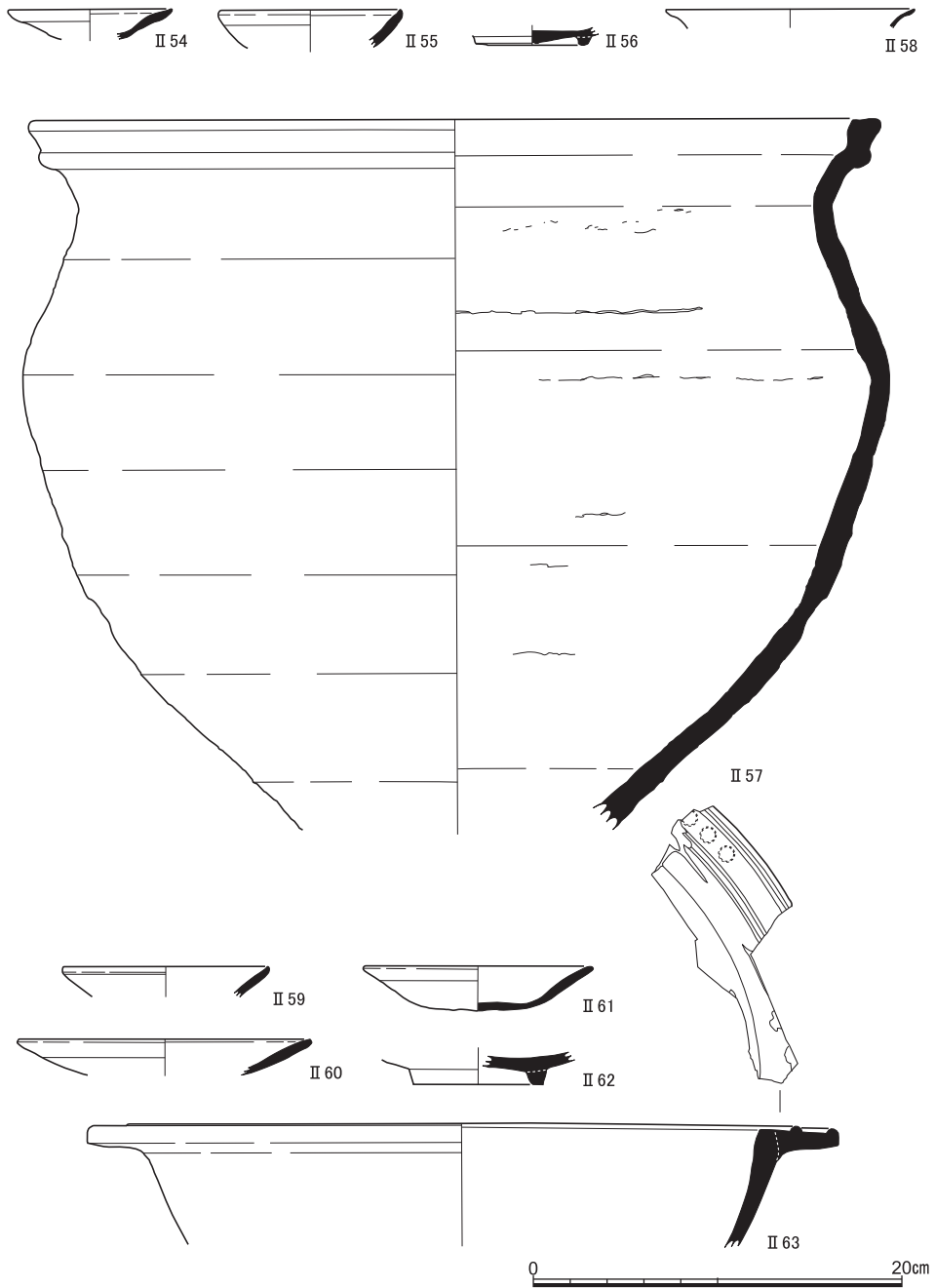


図16 S E12出土遺物（II 54・II 55土師器，II 56・II 57陶器，II 58白磁），S E13出土遺物（II 59～II 61土師器，II 62白磁，II 63瓦器）

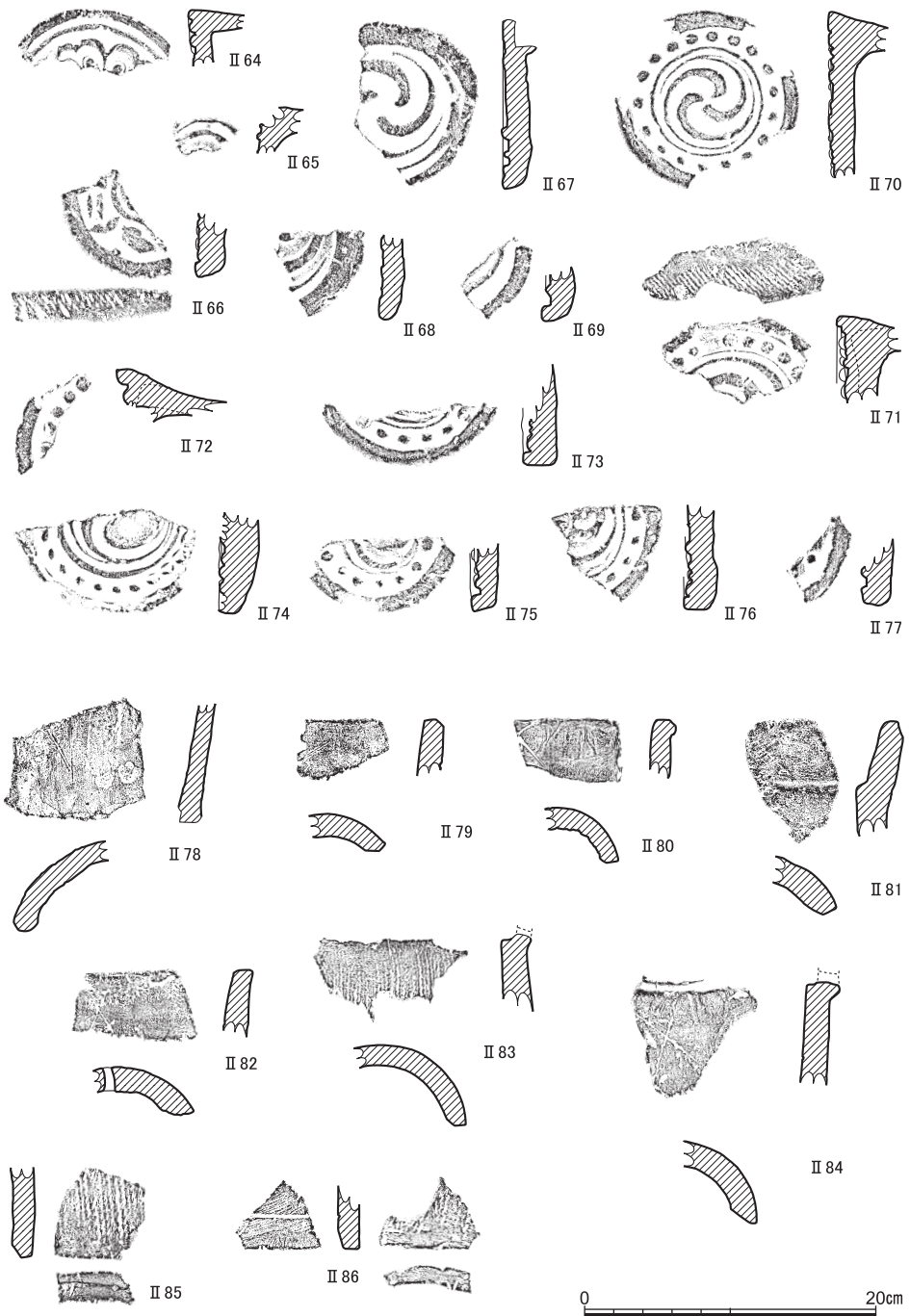


図17 S E 8 出土の軒丸瓦・丸瓦 (II 64~II 77軒丸瓦, II 78~II 86丸瓦) 縮尺1/5

様の圧痕がある。Ⅱ71は灰白色を呈する。上部しか残存しないが、外周には縄叩きが巡る。Ⅱ72は、淡褐色を呈し胎土にクサリ礫が目立つ。Ⅱ73は、外周は平滑に面をとってある。黒灰色を呈する。Ⅱ74・Ⅱ75は、淡橙色を呈し、胎土にクサリ礫が目立つ。Ⅱ77は、巴文を確認できないがここに含めた。外周は指で撫でている。暗灰色を呈する。

Ⅱ78は、瓦当の剝落した丸瓦部。瓦当に接着する端面は、確認できる部分では平滑に面をとってある。凸面は、縄叩きの痕跡がわずかに確認できる部分があるが全体に撫で調整され、鋭利な線刻による篋記号は、「八」字が描かれているのかもしれない。暗灰色を呈し、胎土にはクサリ礫が含まれる。

丸瓦 Ⅱ79～Ⅱ82は、玉縁部に篋記号をもつ。Ⅱ79・Ⅱ81は2本斜線で、Ⅱ80・Ⅱ82は「×」印。Ⅱ80以外は鋭利な刃先の線刻である。Ⅱ82では、中央付近の玉縁基端部の止め釘用の穿孔に線刻が接しているが、切り合い関係はわからない。Ⅱ83・Ⅱ84は、凸部の玉縁境の中央付近に斜格子状の篋記号をもつ。ともに、玉縁の基端部に止め釘用の穿孔をもつ。Ⅱ85・Ⅱ86は先端部に篋記号をもつ。Ⅱ85は、端面ではなく凹面側の内削ぎ状の面取り部に単線1本を確認でき、Ⅱ86は、端面に「八」字を確認できる。なお、Ⅱ86の凹面には、沈線が巡る。Ⅱ87は、玉縁部に穿孔をもたない丸瓦で、Ⅱ88・Ⅱ89は穿孔をもつもの。

軒平瓦 Ⅱ90～Ⅱ99は唐草文で、Ⅱ100・Ⅱ101は宝相華文、Ⅱ102～Ⅱ111は剣頭文。Ⅱ90は、軒の中央下端と思われる顎部で、平瓦部が瓦当まで伸びている。瓦当は、平瓦部から剝離したと思われ、下段しか残存しない。顎部にかけて縦位の細かい縄叩きが見られるが、顎部末端では撫で消され、顎部は平滑に面をとっている。灰白色を呈し焼きがあまり、胎土にクサリ礫を含む。Ⅱ91は圏線しか確認できないが、Ⅱ90と胎土や成形や顎部形状や調整を同じくするので、同様に唐草文だったと判断する。Ⅱ92は、灰褐色を呈する。顎は面をもたず、瓦当角は鈍角である。瓦当下半にも布目の圧痕が残る。平瓦部になだらかに続く顎部には、縦位の縄叩きが残り、また、折り皺と思われる、粘土のよじれと重なりが認められる。平瓦を折り曲げていると思われる。Ⅱ93では、瓦当の上部は篋で平滑に面をとっているが、周縁には布目が残る。平瓦凸面は平行叩きで、顎部には横走る折り皺を認められる。折り曲げ造りだろうか。黒灰色を呈する。同じく黒灰色を呈するⅡ94は、文様がわかるように採拓したが、瓦当に凹凸はほとんどなく、周縁との境界もない。瓦範から抜き出してから全体的に瓦当面を撫でつけたと思われる。破断面をみると、平瓦の端部を範に押し当てるようにしてから顎部に粘土を付加していると思われるが、瓦当面

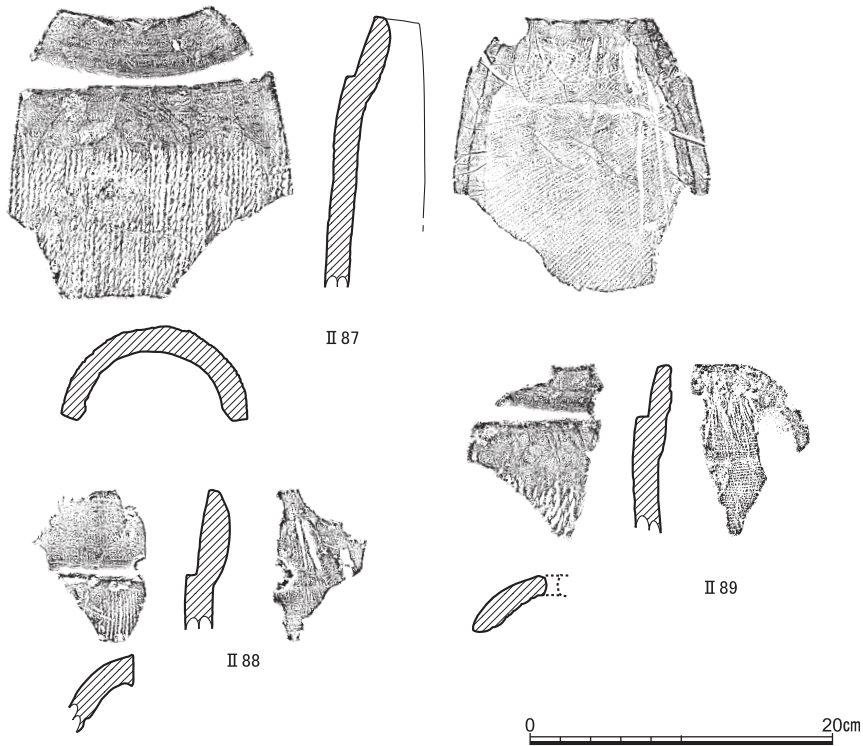


図18 SE 8出土の丸瓦 縮尺1/5

は平滑に撫でられているので布目を見いだせない。

II 95・II 96は同範で、中心飾り近くの唐草に残る長い范傷を共有する。II 95は暗灰色を呈し、焼成はあまい。頸部には斜行する縄叩き痕が残り、平瓦部との境界には、粘土の塗布は見られずに折り皺が認められる。顎の面は不明瞭。II 96は、灰白色を呈し、焼成はあまい。頸部には縦走する縄叩き痕が残り、平瓦部との境界には、粘土の塗布は見られずに折り皺が認められる。顎には明瞭な面がある。また、瓦当右上面は、范に粘土がしっかりと押さえつけられずに隙間があったようで、隅が確認できない。平瓦部凸面には、縄叩きを切って、短軸に平行するくらいに大きく斜行する圧痕になる平行叩きが認められる。暗灰色を呈するII 97は、瓦当面にも布目が残る。II 93と同様に、上部の中央近くは範で平滑に面をとっている。平瓦の折り曲げ部には、粘土を撫でつけた痕跡があるが、顎部は面が不明瞭で薄いので、范に瓦を押し付けた際に顎部から粘土を折り曲げ部に寄せ上げたと思われる。黄灰色を呈するII 98では、平瓦部凸部に縦位に引きずられたような擦痕が顕著である。この擦痕は顎部の成形後に付いたと思われる。SE 8上部から出土しているII 99

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

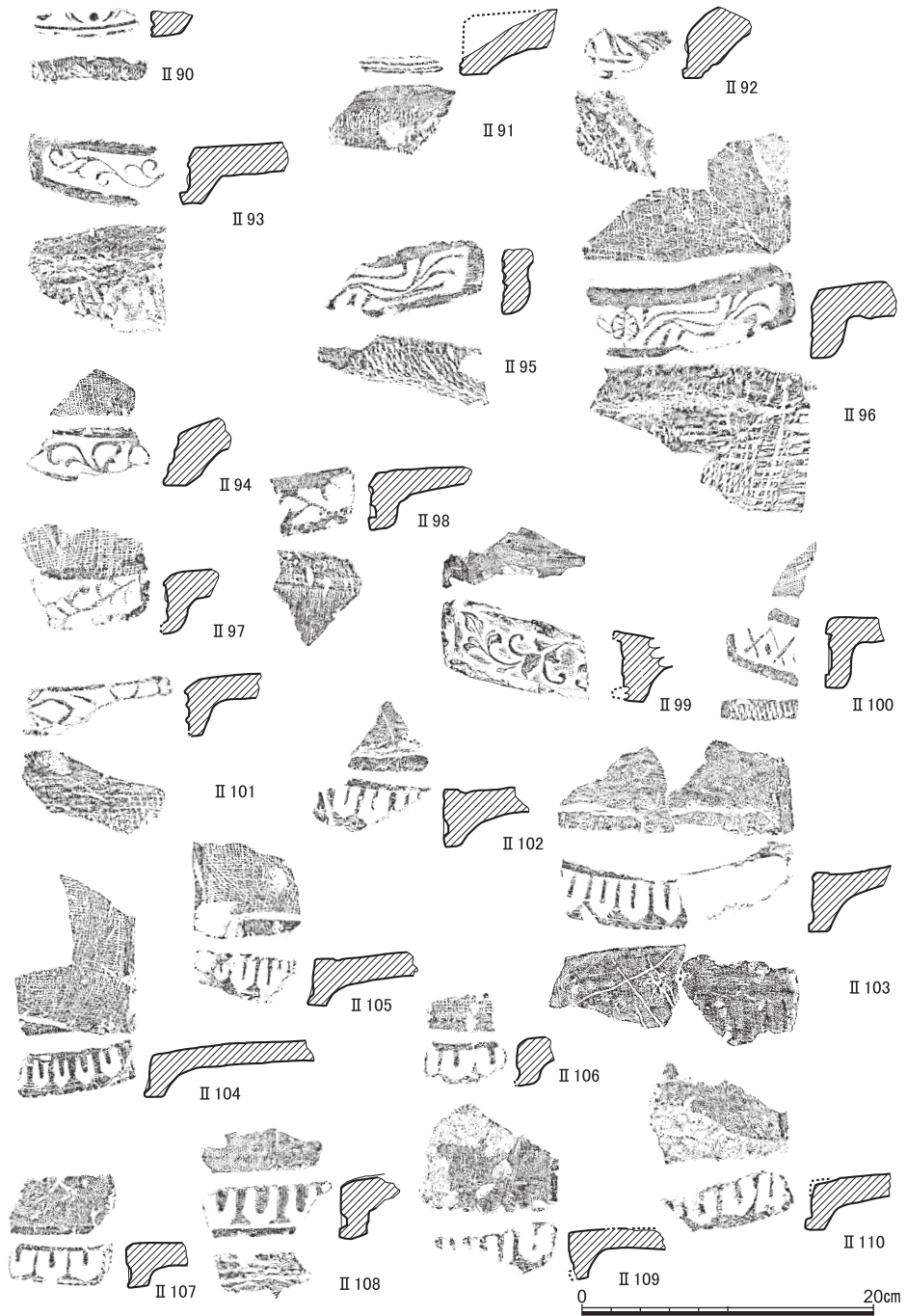


図19 SE 8出土の軒平瓦 縮尺1/5

は、色調は青灰色に近く、顎部も頸部も側縁も平瓦部凹面も平滑に撫でられている。唐草文は、横断面が鋭い三角形で、葉脈が表現されている葉が認められる。

Ⅱ100は、顎部に縦位の縄叩きが認められるが、顎部でも、撫でつけに切られて縦走する縄叩き痕が認められるので、折り曲げ造りだったと思われる。青灰色を呈する。灰白色を呈するⅡ101は、顎部に、たわんだ布の圧痕が認められ、それは平瓦凸面の縄叩き痕を切っている。

Ⅱ102・Ⅱ103は、淡褐色を呈し、胎土にクサリ礫が目立つ。筈傷と思われる圧痕を数箇所て共有しているように思われ、同筈と判断する。調整も同じで、平瓦部凹面の瓦当面側の端部は、凹面に水平に撫でて布目を消し、顎部や側縁も平滑に筈で撫でる。Ⅱ103の平瓦部凸面は縦位にしっかり撫でつけられ、顎部にかけて筈記号が認められる。Ⅱ104・Ⅱ105は、暗灰色を呈し胎土にクサリ礫は見られないが、調整手法はⅡ103と同じである。Ⅱ106・Ⅱ107は、寸胴の剣頭文で、ともに瓦当上端部を削ぎ落とすように面取りする。Ⅱ106は淡橙色を呈し、Ⅱ107は暗灰色を呈するが、ともに胎土に雲母や長石が目立つ。暗灰色を呈して胎土にはクサリ礫が目立つⅡ108も、瓦当上端部を削ぎ落とすように面取りするが、側縁近くには面取りを免れて布目が残る。顎部にも布目がある。瓦筈の木目が瓦に転写されており(図版7-2)、横木取りで筈を製作したことがわかる。剣頭文様の凹部および凸部側面に残る木目から年輪を数えると、確認できるだけでも50本以上ある。Ⅱ109～Ⅱ111も、平瓦部凸面は縦位にしっかりと撫でつけられる。いずれも、暗灰色を呈する。Ⅱ109は、剣頭文の瓦当上端に周縁はなく、平瓦部との境界も調整をしていないことがわかるが、Ⅱ110・Ⅱ111は瓦当上端の調整は欠損していて不明。

Ⅱ112・Ⅱ113は、瓦当の剝落した平瓦部。ともに、凹面には布目が残るが、凸面は、Ⅱ112は短軸に平行する圧痕になる平行叩きを縦位に撫で消したと思われ、Ⅱ113は指頭と思われる圧痕が広く残る。Ⅱ112は、淡褐色を呈し、胎土にクサリ礫が目立つ。Ⅱ113は暗灰色を呈する。

平瓦 Ⅱ114～Ⅱ125は端面に筈記号をもつ。図の上方を天としたときに、Ⅱ114～Ⅱ118は右辺に認められ、Ⅱ120～Ⅱ123は左辺に認められる。Ⅱ119は、端面の遺存率が高く、中央に間隔を置いて1本ずつあるのが確認できた。2本の筈記号の認められるⅡ114とⅡ115では、右辺から筈記号までの距離が約3cm異なるが、両者は、胎土・焼成とも酷似しているほか、端面もともに、幅1mmの凸線状の浮き出しが残り、傷があった筈状の工具で平滑に撫でられたと思われる。Ⅱ115では、筈による撫でが筈記号に先行している

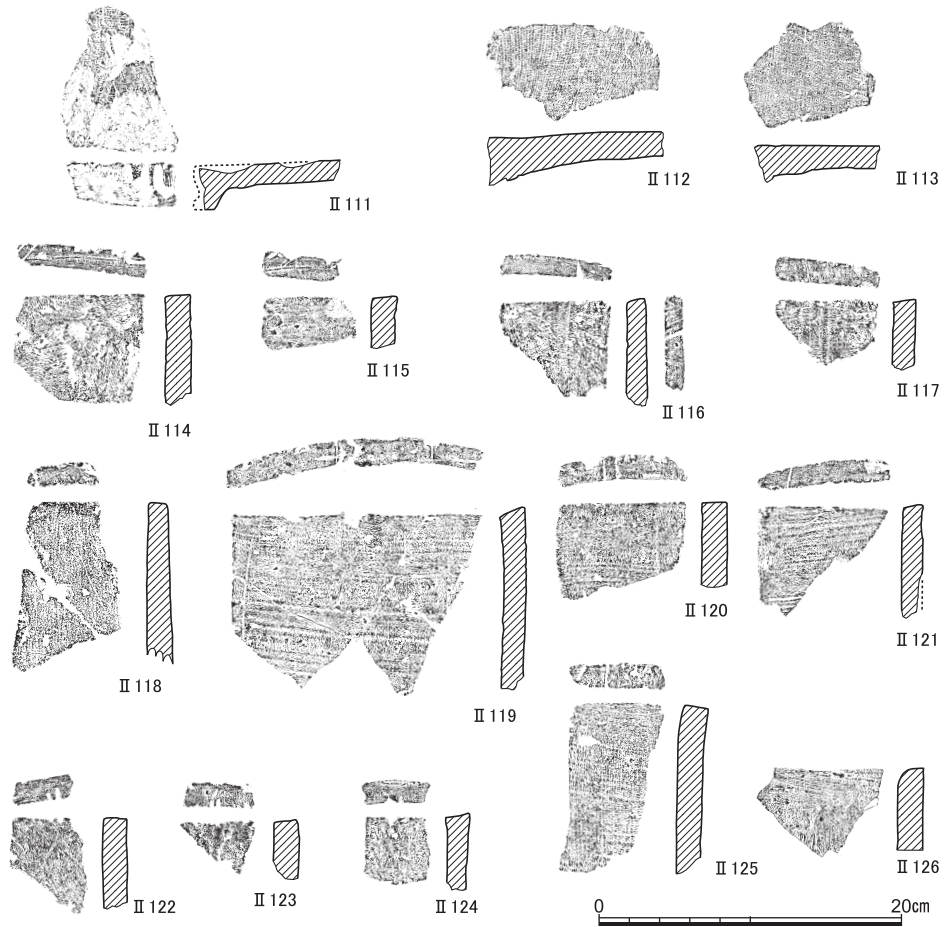


図20 SE 8出土の軒平瓦・平瓦（II 111～II 113軒平瓦，II 114～II 126平瓦） 縮尺1/5

ことを確認できる。窺記号の位置が右辺により近いII 115では、右辺側の窺記号の線刻は、端面の中央付近で途切れている。II 116は、端面の窺記号は右辺方向から浅い入射角で窺が入ってきている。また、右辺にも窺記号が認められる。II 117は、窺記号は1本しか認められない。II 118も、残存部では1本しか認められない。II 120・II 122・II 123は左辺近くに2本あるが、II 121は1本のみ。II 122・II 123は、色調・焼成・胎土・調整が同じで、窺記号についても、左辺からの距離はほぼ等しい点、端面から凹面にかけての稜に刻まれている点、ほかの窺記号と異なって横断面が「U」字にちかく鈍い点、といった特徴を共有している。II 124は左右の側面が残っておらず、確認できるのは、II 116ほどではないが、横断面が上に開いた「V」字の1本だけである。II 125も、左右の側面が残っていないが、

確認できるのは1本であり、II 119と同様かもしれない。II 126は、凹面端部際に6条の窠描きの線刻をもっている。

II 127～II 140には、凹面や凸面の圧痕で注目されるものを集めた。II 127～II 129は凹凸両面に縄の圧痕が認められる。II 127は、両面ともに1段左撚り縄の圧痕が認められ、凹凸両面とも叩き板による圧痕と考えられる。凹面には、側縁部付近に、叩き痕跡の上から粘土が塗布されており、結果的に瓦の厚みの均質性が維持されている。胎土や色調がよく似たII 128とII 129では、凸面の縄は1段左撚りだが、凹面では、浅い圧痕で1段左撚りの縄のレリーフ状の圧痕が認められる(図版7-2)。別の瓦の凸面の叩き板の圧痕が転写されたと思われる。なお、どちらの破片にも凹凸両面に離れ砂を認められる。

II 130～II 134は凹面に斜格子叩きをもつ。II 130は、淡橙色を呈し、胎土にクサリ礫が目立つ。II 131・II 132は、ともに、色調は灰白色を呈し焼成があまり。外面の叩きは平行叩きか縄叩きか不明。II 133・II 134は外面に縄叩きが認められる。II 134の凹面には、叩きが及ばないところや、叩きを撫で消したところがある。

II 135の凸面は、斜行する圧痕の平行叩き。II 96の軒平瓦でも、縄叩きを切る同様の叩きが認められた。II 136・II 137の凸面には、斜格子叩きを切る縄叩きが認められるが、II 137の縄叩きは、側縁付近には認められない。II 136・II 137では、凹面の布目の上から網代のような物質の当たりが付く。経は幅7～8mmほどの平滑なもので、緯は、同様の幅だが、繊維を左に撚った糸のようなものが3本一単位で付加されている(図版7-2)。内面に最終的に窠描きの線刻の入ったII 136は、凸面の縄叩きの縄の一つの節の中にも、凹面の布目の一条の経糸の中にも、繊維を認めることができる。凸面には平行叩きしか認められないII 138も、凹面はII 137と同様で、布目に繊維が確認でき、また網代状の圧痕がその布目を切る(図版7-2)。ただし、緯の糸の本数は5本である。外面の叩きは、II 135と同様のものならば、横位に叩いているかもしれない。

II 139は、凸面には横走する線刻が認められ、凹面には棒状の物質の当たりと、指によると思われる切り合いのある押しつけ痕跡が認められる。II 140は、タタラから切り離されるとき鉄線切り痕跡が認められるが、凹面側には鉄線がカーブをし始めた部分に相当するのに対して凸面側ではまだカーブしていない。また、端面は、凸面側の稜は撫でつけて凹面側の稜は平滑な窠撫でと思われるが、中央部にはタタラ成形の時の擦痕が残る。凹凸両面には、縄の圧痕が認められ、凸面は縦位の縄叩きだが、凹面は横位である。偶発的なのか、叩き調整が例外的に成形時におこなわれたのかはわからない。

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

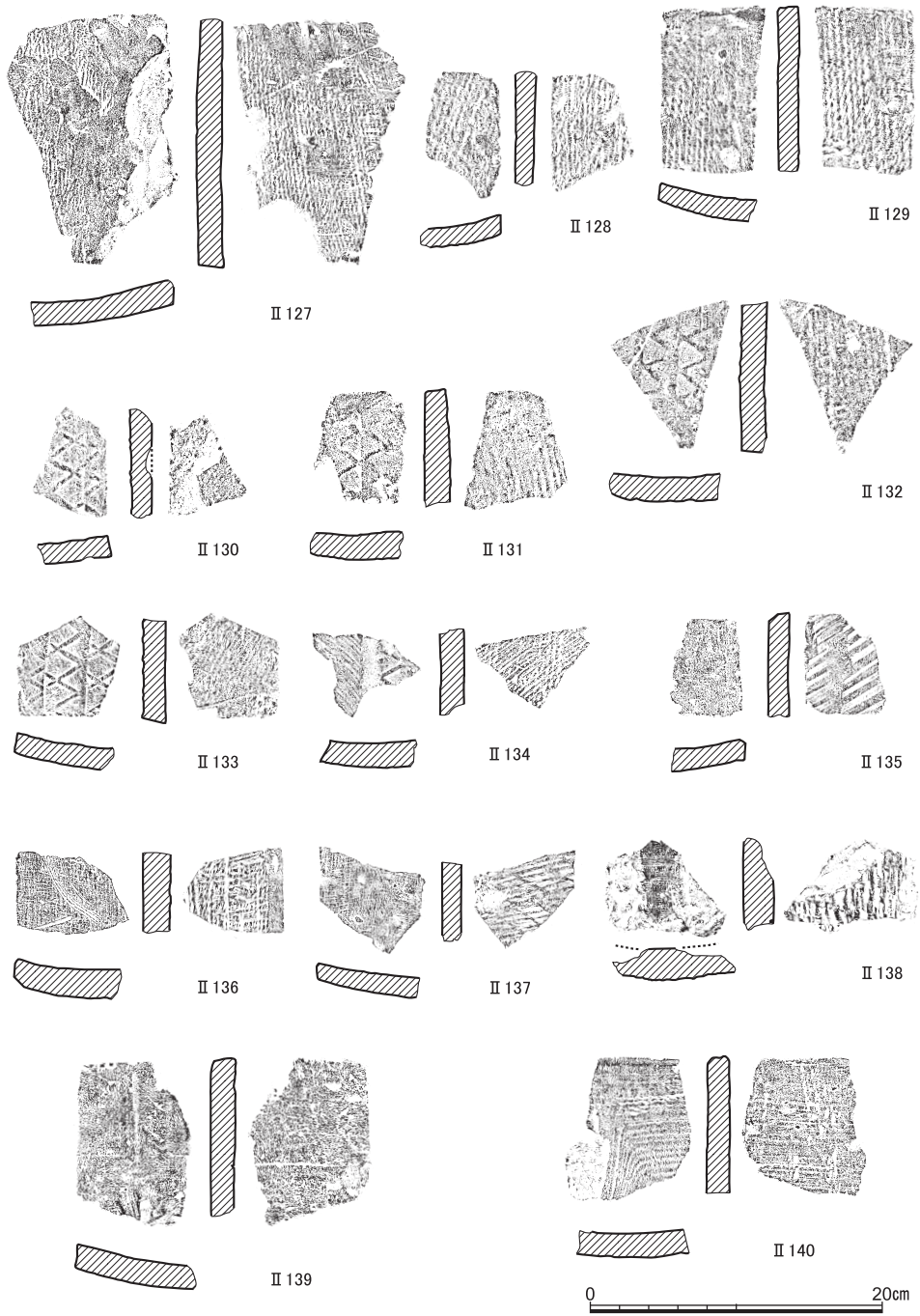


図21 SE 8 出土の平瓦 縮尺1/5

(4) 近世遺構の出土遺物 (図22~26)

S E 11出土遺物 (II 141~II 143) 遺物は、量が少なく細片ばかりである。II 141・II 142は土師器皿。前者は雛皿で後者は見込みに圈線が巡る。II 143は肥前系の陶器鉢で、白色釉に刷毛目。この遺構の帰属時期は17世紀と判断する。

S E 10出土遺物 (II 144~II 169) II 144~II 146は土師器。II 144・II 145は見込みに圈線が巡る皿で、前者は灰白色を呈する。濃橙色を呈する後者は、口縁部にススが付着しており、灯明皿として機能していたと思われる。II 146は塩壺蓋。II 147~II 149は、軟質施釉陶器のミニチュア小杯と灯火具。II 150~II 160は陶器で、II 150は灯明皿。II 151~II 154は蓋物の身ないし椀。II 152は肥前系であろうか。II 153は京・信楽系。II 154は京焼で、外面に落款があり、高台は無釉。II 155は鉢で、信楽と思われる。II 156~II 158は蓋。II 156はII 154と組物だった可能性がある。また、II 157とII 158は同一個体の可能性があり、II 152と組物になっていたかもしれない。II 159・II 160は鉄釉のかかる鍋。II 161~II 169は磁器。II 161は、蛇の目釉剥ぎの皿。II 163~II 166は染付椀で、II 166は、くらわんか。II 168の赤絵の磁器とII 169の染付の椀は、裏込めから出土した。

このほかに、赤色顔料の塗布された瓦質土器や、硯や、鞆の羽口や、被熱して内面が粘着した溶解炉の破片と思われるものも出土している。この遺構の帰属時期は18世紀後半と判断する。

S E 14出土遺物 (II 170~II 176) II 170は土師器皿で、見込みに圈線が巡る。ススが付着しており、灯明皿として機能していたと思われる。II 171~II 173は陶器で、II 171・II 172は京・信楽系の椀。II 173は信楽のすり鉢。II 174~II 176は、磁器染付の椀。II 176は、いくぶん焼け歪んでいると思われるが、器壁が薄く畳付も平滑である。

このほかに、瓦や伏見人形なども出土している。この遺構の帰属時期は18世紀後半と判断する。

S K 1 出土遺物 (II 177~II 188) II 177~II 180は土師器。II 177・II 178は皿で、前者は雛皿で、後者は見込みに圈線が巡る。II 179は塩壺の底部で、II 180は火消し壺の蓋。II 181~II 185は陶器で、II 181~II 184は椀。II 181・II 182・II 184は京・信楽系であろう。II 183は京焼で外面には釉下に鉄絵の飛雲文が見られる。II 185のミニチュア花瓶も京焼と思われる。II 186~II 188は磁器染付。II 187は、中世の井戸S E 8が埋積しきってしまうまえにその上部にあった、落ち込みから出土した破片とも接合している。II 188の仏飯は、ほぼ完形である。

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

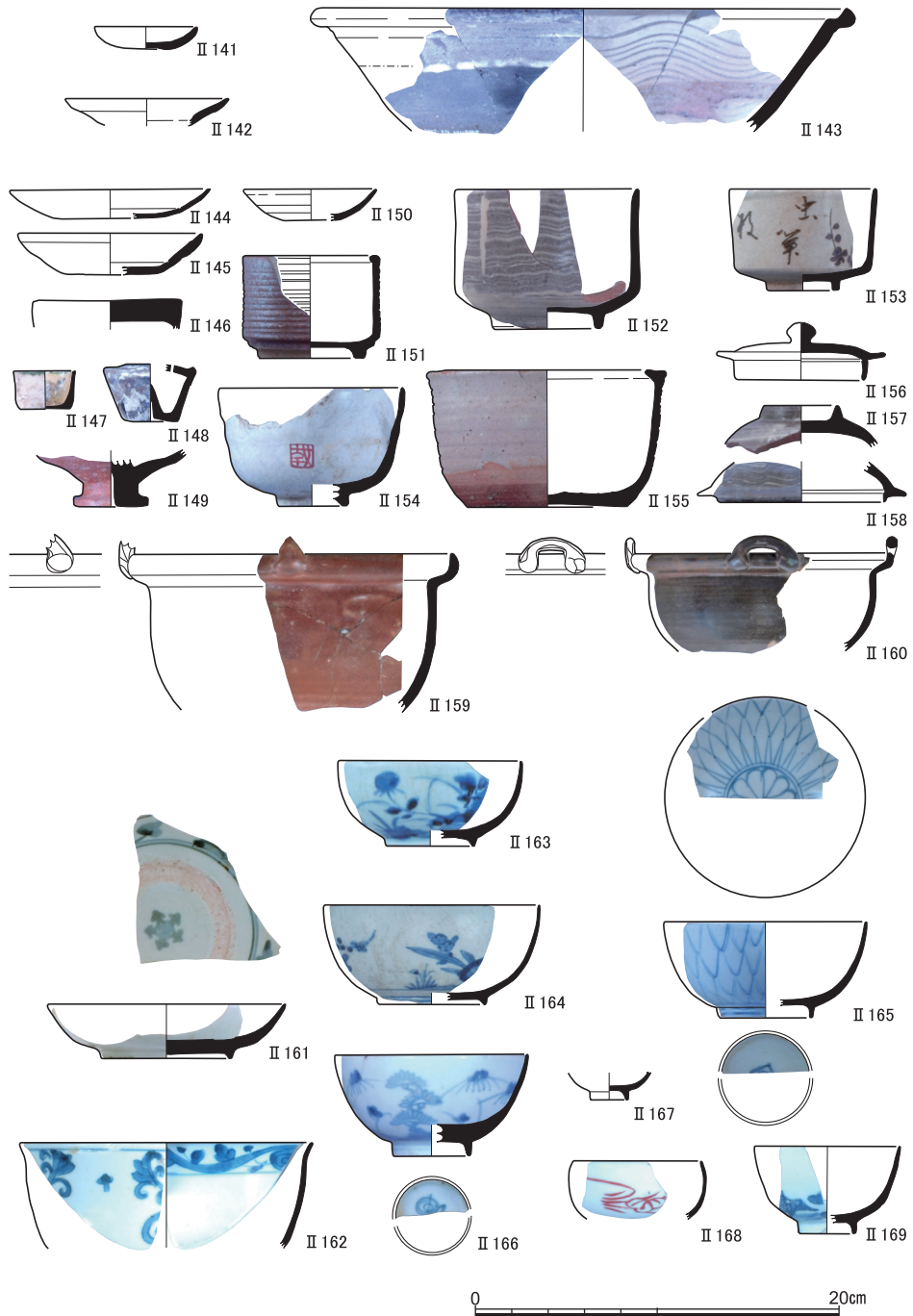


図22 SE11出土遺物（II141・II142土師器，II143陶器），SE10出土遺物（II144～II146土師器，II147～II149軟質施釉陶器，II150～II160陶器，II161～II169磁器）

遺 物

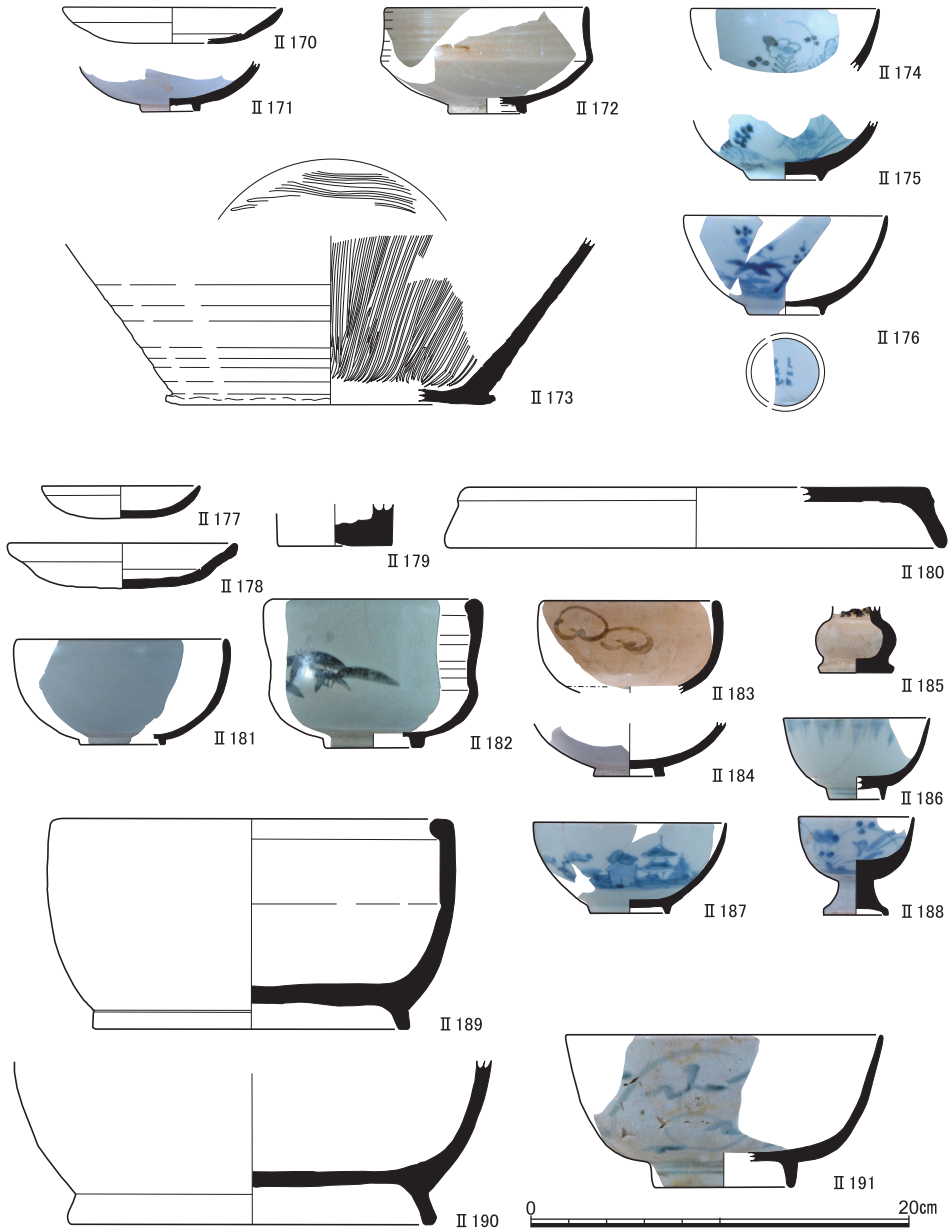


图23 S E 14出土遺物 (II 170土師器, II 171~II 173陶器, II 174~II 176磁器染付), S K 1 出土遺物 (II 177~II 180土師器, II 181~II 185陶器, II 186~II 188磁器染付), S K 2 出土遺物 (II 189~II 190土師器, II 191磁器染付)

このほかに、瓦や硯や滑石製石鍋の破片も出土している。この遺構の帰属時期は18世紀後半と判断する。

S K 2 出土遺物 (II 189～II 191) 3 個体しか出土していない。II 189・II 190は土師器の火入。II 190は、直線的に割れている底部の破断面の内面側と外面側に深さ1～2mmの擦り切り痕を確認でき、意図的に直線的に切断したことがうかがえる。II 191は磁器染付の椀。18世紀後半の遺構と判断する。

S X 5 出土遺物 (II 192・II 193) 遺物はほとんど出土していない。II 192は磁器染付皿。II 193は、磁器染付椀の底部で、呉須はくすんでいる。18世紀の遺構と判断する。

S X 6 出土遺物 (II 194～II 198) II 194は、備前のすり鉢。II 195～II 198は磁器椀で、II 196以外は染付。このほかにも、弥生土器、中世の土師器や青磁や瓦や信楽大甕や備前すり鉢の破片が、集石の礫の中に紛れるように出土しているが、遺構の帰属時期は18世紀と判断する。

S X 7 出土遺物 (II 199～II 201) II 199は陶器椀。信楽であろうか。II 200・II 201は青磁の椀で、ともに近世の肥前系と思われる。このほかに、縄文土器・弥生土器に加え

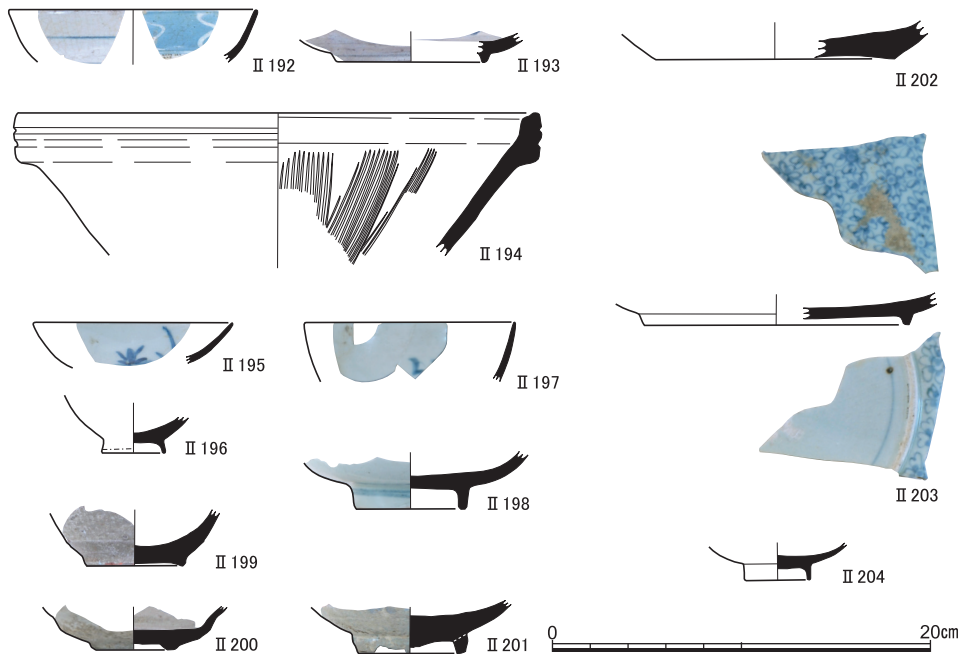


図24 S X 5 出土遺物 (II 192・II 193磁器染付), S X 6 出土遺物 (II 194陶器, II 195～II 198磁器), S X 7 出土遺物 (II 199陶器, II 200・II 201青磁), S X 9 出土遺物 (II 202陶器, II 203・II 204磁器)

遺 物

て、1段撫で手法の土師器や灰釉系陶器や古瀬戸大皿や中国産の青磁・白磁など中世後半の遺物も出土するが、鉄釉のかかった近世の信楽焼のすり鉢底部も出土している。S X 7は、層位的に18世紀の遺構と判断しているが、18世紀と確実視できる遺物は認められなかった。

S X 9 出土遺物 (Ⅱ202～Ⅱ204) Ⅱ202は信楽で、壺の底部と思われる。中世にさかのぼるかもしれない。Ⅱ203は磁器染付の皿。Ⅱ204は磁器底部。

拳大集石出土遺物 (Ⅱ205～Ⅱ223) Ⅱ205・Ⅱ206は土師器で、前者は雛皿で後者はロクロ成形の鉢。Ⅱ207は、見込みに圏線が巡るロクロ成形の土師器の内外面に鉄釉のかかった軟質施釉陶器。Ⅱ208～Ⅱ211は陶器椀。Ⅱ208は京・信楽系で、釉下に鉄絵で文様を描く。Ⅱ209は京焼で、釉下に呉須で文様が描かれている。Ⅱ210は鎧椀。瀬戸・美濃系であろう。Ⅱ211は肥前系。Ⅱ212は、京・信楽系の蓋物の身だろう。Ⅱ213は、京・信楽系の陶器蓋。Ⅱ214は堺のすり鉢か。Ⅱ215～Ⅱ223は磁器で、Ⅱ215～Ⅱ217・Ⅱ219～Ⅱ222は染付。Ⅱ215・Ⅱ217は内面が蛇の目釉剥ぎで、Ⅱ216は内面に砂目がある。Ⅱ216は体部を意図的に打ち欠いていることから、円盤を製作するときに誤って器体を割ってしまったと思われる。Ⅱ218は蓮弁の輪花椀。Ⅱ220も体部に意図的に打ち欠きを入れた破断面があるが、半周近くが滑らかに曲線的に破損しているために、円盤の製作を途中で断念したと思われる。Ⅱ223は水滴。

このほかにも、砥石や寛永通宝の破片も出土している。なお、拳大集石から出土した中世の備前焼すり鉢破片が、中世備前焼のすり鉢破片が比較的多く出土したS X 6出土の破片と接合している。遺構の年代は18世紀である。

S D 3 出土遺物 (Ⅱ224～Ⅱ226) 出土量がわずかで、図化できるものは遺構の帰属年代よりも古いと思われるものである。Ⅱ224・Ⅱ225は陶器の角皿と蓋で、織部風。ともに17世紀のものであろう。Ⅱ226は染付の杯。遺構の年代は、層位的に、19世紀と考えられる。

S E 1 出土遺物 Ⅱ227は黒楽。高台付近で破損したと思われる。遺構の年代は、層位的に、19世紀と考えられる。

S E 2 出土遺物 Ⅱ228は磁器の蓋物の身で、木桶内から出土した。遺構の年代は、層位的に、19世紀と考えられる。なお、周辺の遺物包含層からは、泥面子が16点散在して出土している。

S E 4 出土遺物 (Ⅱ229～Ⅱ242) Ⅱ242は裏込から出土したが、そのほかいずれも井

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

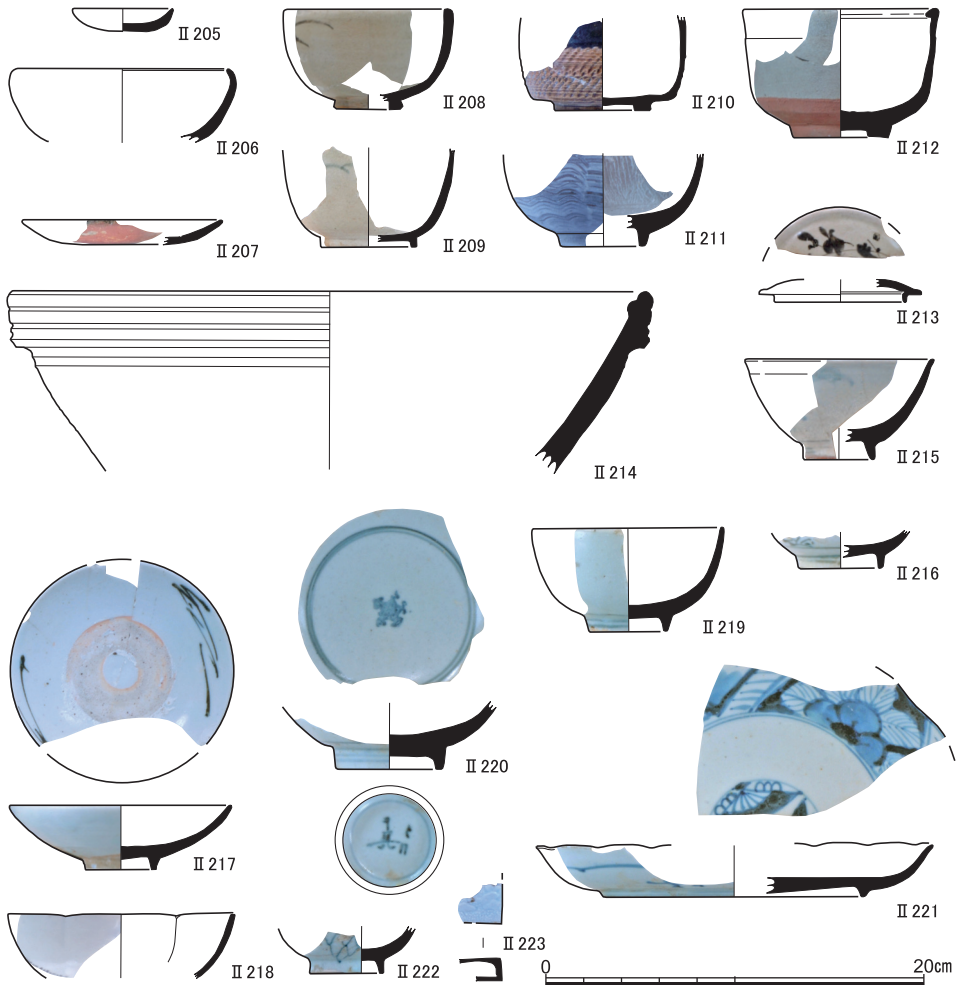


図25 拳大集石出土遺物（II 205・II 206土師器，II 207軟質施釉陶器，II 208～II 214陶器，II 215～II 223磁器）

筒から出土している。II 229～II 232は土師器皿で，II 232以外は完形。薄手の作りで，見込みには圈線が巡らない。II 233は，ほぼ完形の陶器灯明受け皿である。II 234は陶器鍋。内外面とも鉄釉で，外面下半には炭化物が付着している。II 235～II 240は磁器染付。II 237は蛸唐草模様の花瓶。II 240の蓋は，つまみをほとんど欠いているが体部は完形。磁器染付では，図化できなかったが，端反り口縁の椀も出土している。

II 241は，「長」の刻印を持つ棧瓦。II 242は，裏込から出土した染付椀で，破断面が著しく磨滅している。このほかに，木桶内からは青銅製キセルの吸口・雁首が2点ずつ出土している。

遺 物

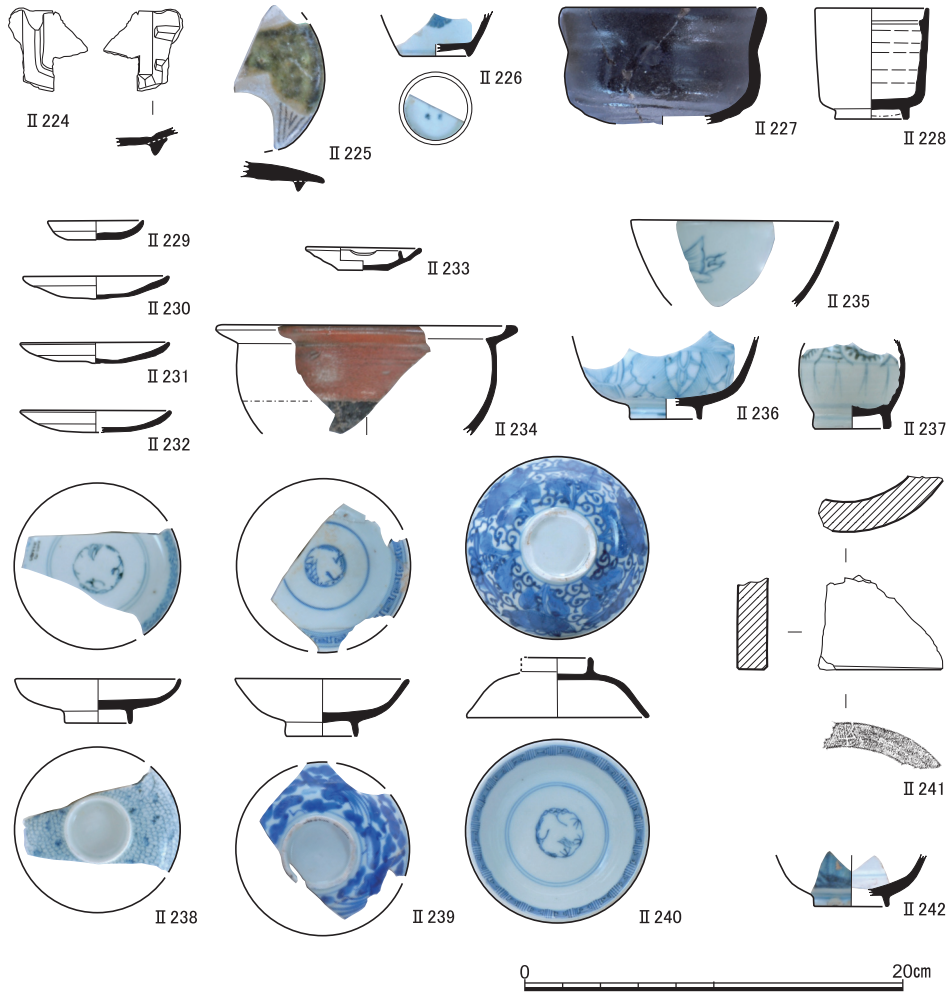


図26 S D 3 出土遺物 (II 224・II 225陶器, II 226磁器染付), S E 1 出土遺物 (II 227陶器), S E 2 出土遺物 (II 228磁器), S E 4 出土遺物 (II 229～II 232土師器, II 233・II 234陶器, II 235～II 240・II 242磁器染付, II 241棧瓦)

(5) 包含層出土の遺物 (図版7, 図27～32)

ここでは, 製作時期よりはるかに新しい年代の層準で出土した遺物も含めて報告する。

褐色土出土遺物 (II 243～II 247) 拳大集石の下位に広く堆積しているシルト質の遺物包含層で, II 243～II 245は陶器椀。II 245は, 内面が青緑釉で, 見込みは蛇の目釉剥ぎになると思われ, 外面は透明釉で高台は無釉。18世紀中葉の肥前系だろうか。II 246・II 247は磁器染付でII 247は椀。

茶褐色土II 出土遺物 (II 248～II 270) II 248～II 257は, 調査区西辺の西落ち段差よ

京都大学病院構内A G16区の発掘調査

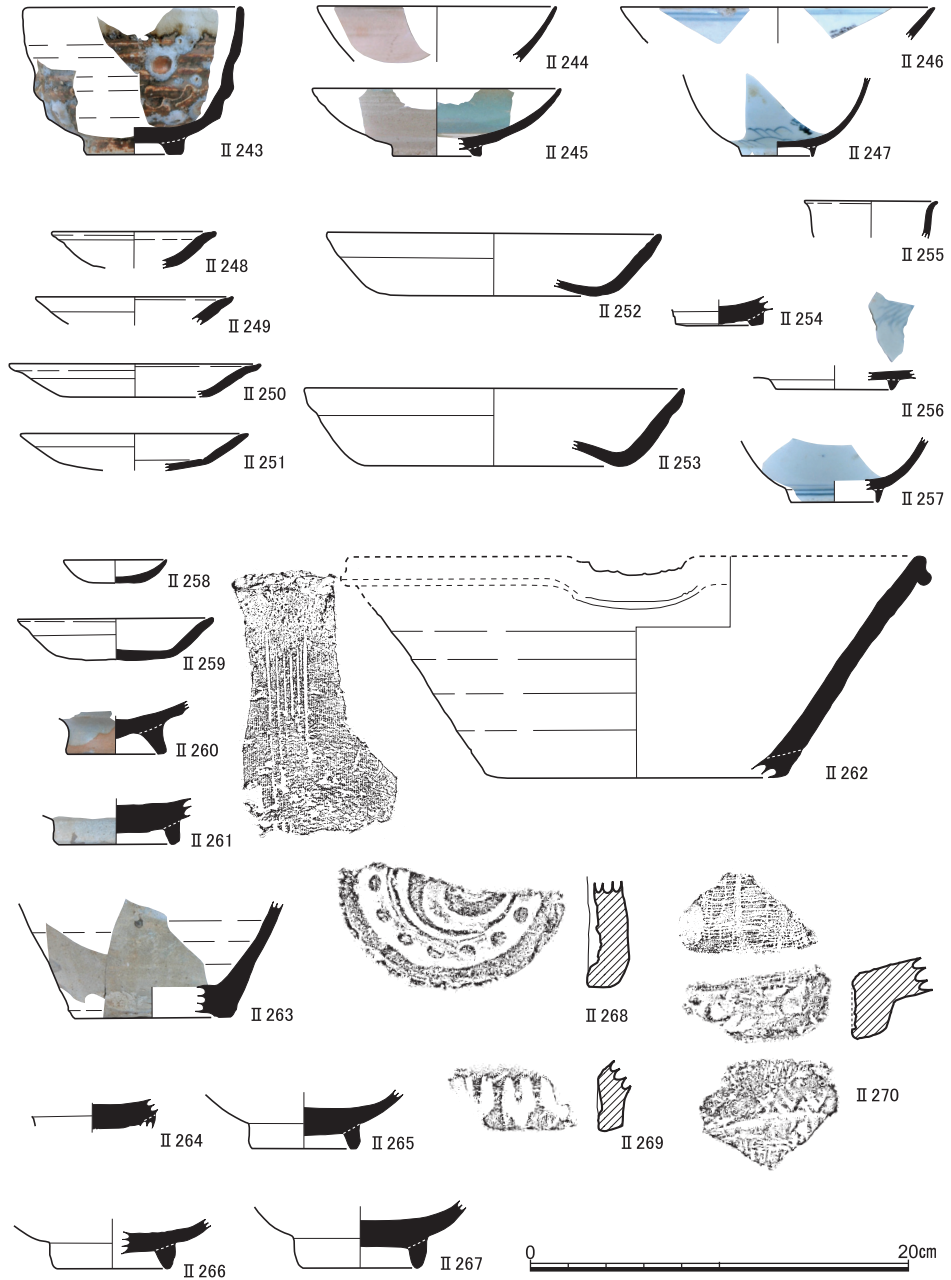


図27 褐色土出土遺物（II 243～II 245陶器，II 246・II 247磁器染付），茶褐色土II出土遺物（II 248～II 253・II 258・II 259土師器，II 254・II 260～II 263陶器，II 255・II 265～II 267青磁，II 256・II 257磁器，II 264白磁，II 268軒丸瓦，II 269・II 270軒丸瓦）

遺 物

り西部で検出された、不整形の浅い窪地状の落ち込みから出土した。Ⅱ248～Ⅱ253は土師器で、Ⅱ254は天目椀底部。Ⅱ255は青磁の小杯。Ⅱ256・Ⅱ257は磁器染付。Ⅱ258～Ⅱ270は、そのほかの茶褐色土Ⅱから出土したもので、陶磁器では底部の出土が目立つ。Ⅱ258・Ⅱ259は土師器皿で、前者は近世の小皿。Ⅱ260～Ⅱ263は陶器。Ⅱ264は白磁。Ⅱ265～Ⅱ267は青磁。Ⅱ268～Ⅱ270は中世の軒瓦で、Ⅱ268は珠点をもつ巴文軒丸瓦。Ⅱ269・Ⅱ270の軒平瓦は、前者が剣頭文で後者は唐草文。茶褐色土Ⅱ出土の遺物では、中世の土師器や輸入磁器が目立つが、近世の土師皿や染付もあり、Ⅱ257は18世紀のものだろう。

土石流堆積層出土遺物（Ⅱ271～Ⅱ279） Ⅱ271は1段撫で手法の土師器皿で、Ⅱ272は瓦質の大型容器であろうか。これらは中世のものだが、Ⅱ273～Ⅱ278の陶磁器はいずれも近世のもの。Ⅱ273は焼締陶器の底部で、刻印をもつ。Ⅱ274～Ⅱ276は陶器椀で、Ⅱ277・Ⅱ278は磁器染付。Ⅱ279は中世の軒丸瓦で、珠点をもたない巴文。これらの遺物は、新しいものでも18世紀におさまるだろう。

茶褐色土Ⅰ出土遺物（Ⅱ280～Ⅱ295） Ⅱ280～Ⅱ282は土師器。Ⅱ280は見込みに圏線が巡る近世のもので、Ⅱ282は蛸壺であろうか。Ⅱ283は瓦器小椀。Ⅱ284は軟質施釉陶器の鬢水入。Ⅱ285～Ⅱ288は、陶器椀。Ⅱ289～Ⅱ295は磁器染付。Ⅱ294の底部の円盤加工は、はじめに内面から打ち欠いた後に外面から微細な剝離を入れている。これらの遺物に照らして、茶褐色土Ⅰも18世紀までの遺物包含層といえる。

灰褐色土出土遺物（Ⅱ296～Ⅱ327） Ⅱ296～Ⅱ306は、軟質施釉陶器や、飛雲文・宝珠文を下絵に描く陶磁器。近接する278地点出土の乾山焼資料を参考に、乾山焼に関わると思われる資料を抽出してみた。Ⅱ307～Ⅱ309は、蓮月焼と思われるもの。Ⅱ310～Ⅱ315は、銘のある陶磁器。Ⅱ311は「岩倉山」で、Ⅱ312・Ⅱ313は「錦光山」。Ⅱ314は「宝山」で、Ⅱ315は「道仙造」。灰褐色土は19世紀までの遺物包含層といえる。

Ⅱ316は磁器染付の底部を円盤にしたもので、最終調整は内面側からの押圧剝離。Ⅱ317は輪トチン。Ⅱ318は陶製の紡錘車。Ⅱ319・Ⅱ320は印で、Ⅱ319は、正面は竜宮城を意匠にしたと思われ、裏面は「十二」の縦彫り。Ⅱ320は、篆書体で3面に漢字が彫られており、上面は左から「本間」と読める。Ⅱ321～Ⅱ327は石製硯の破損品。

そのほかの瓦（Ⅱ328～Ⅱ346） 近世の遺構などから出土した中世の軒瓦を中心に図示した。調査区西辺の方形集石土坑S X 6・7からの出土品が多い。Ⅱ328は単弁蓮華文軒丸瓦。Ⅱ329～Ⅱ334は巴文軒丸瓦。Ⅱ335は比較的残りのよい丸瓦。Ⅱ336～Ⅱ339は唐草文軒平瓦で、Ⅱ339は中央が巴文になっている。Ⅱ340～Ⅱ345は剣頭文軒平瓦。Ⅱ341の平

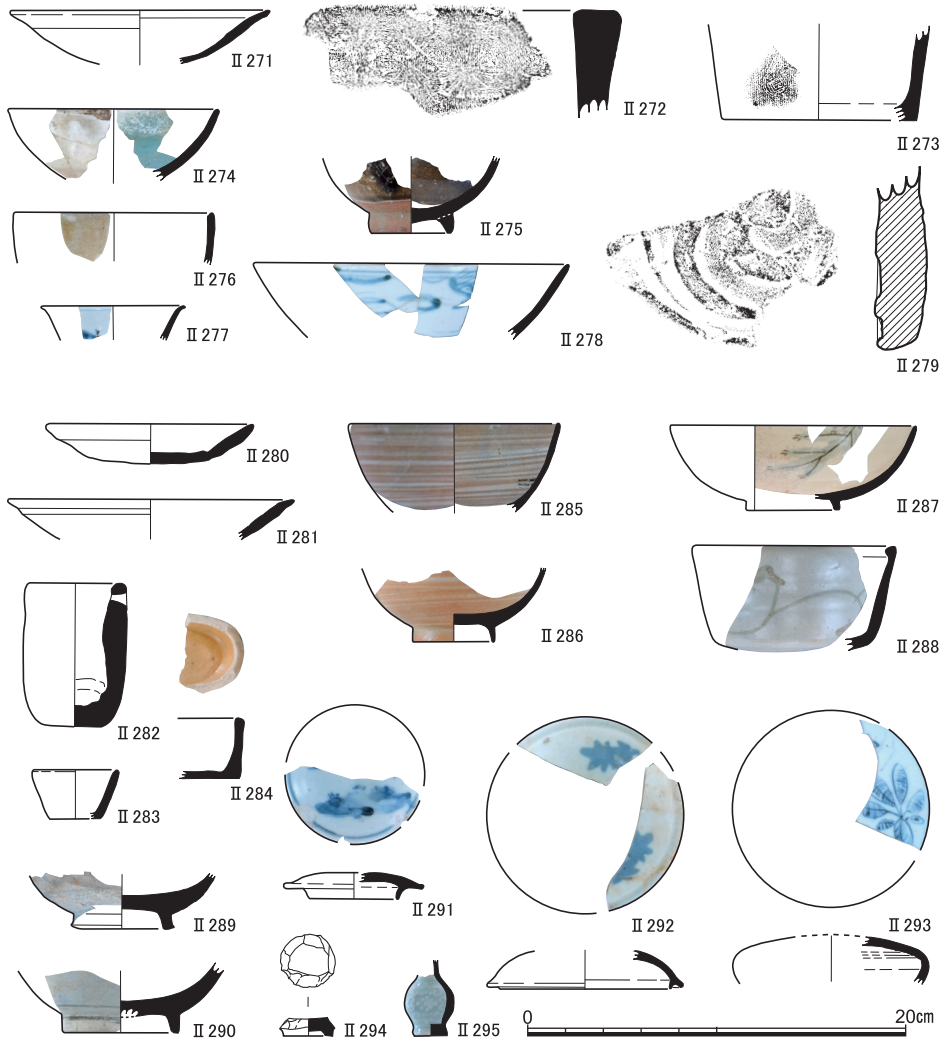


図28 土石流堆積物出土遺物（II 271土師器，II 272瓦器，II 273～II 276陶器，II 277・II 278磁器染付，II 279軒丸瓦），茶褐色土 I 出土遺物（II 280～II 282土師器，II 283瓦器，II 284軟質施釉陶器，II 285～II 288陶器，II 289～II 295磁器染付）

瓦部凸面には、「V」字形の窠記号が見られる。II 346は近世の軒棧瓦でわずかに刻印があることがわかる。

泥面子 本調査区からは泥面子が137点出土している。茶褐色土から出土しているのは1点のみで、そのほかは、灰褐色土やそれより上位の地層に帰属する。茶褐色土および灰褐色土から出土したものについては、すべて拓影を示した（図31・32）。

遺 物

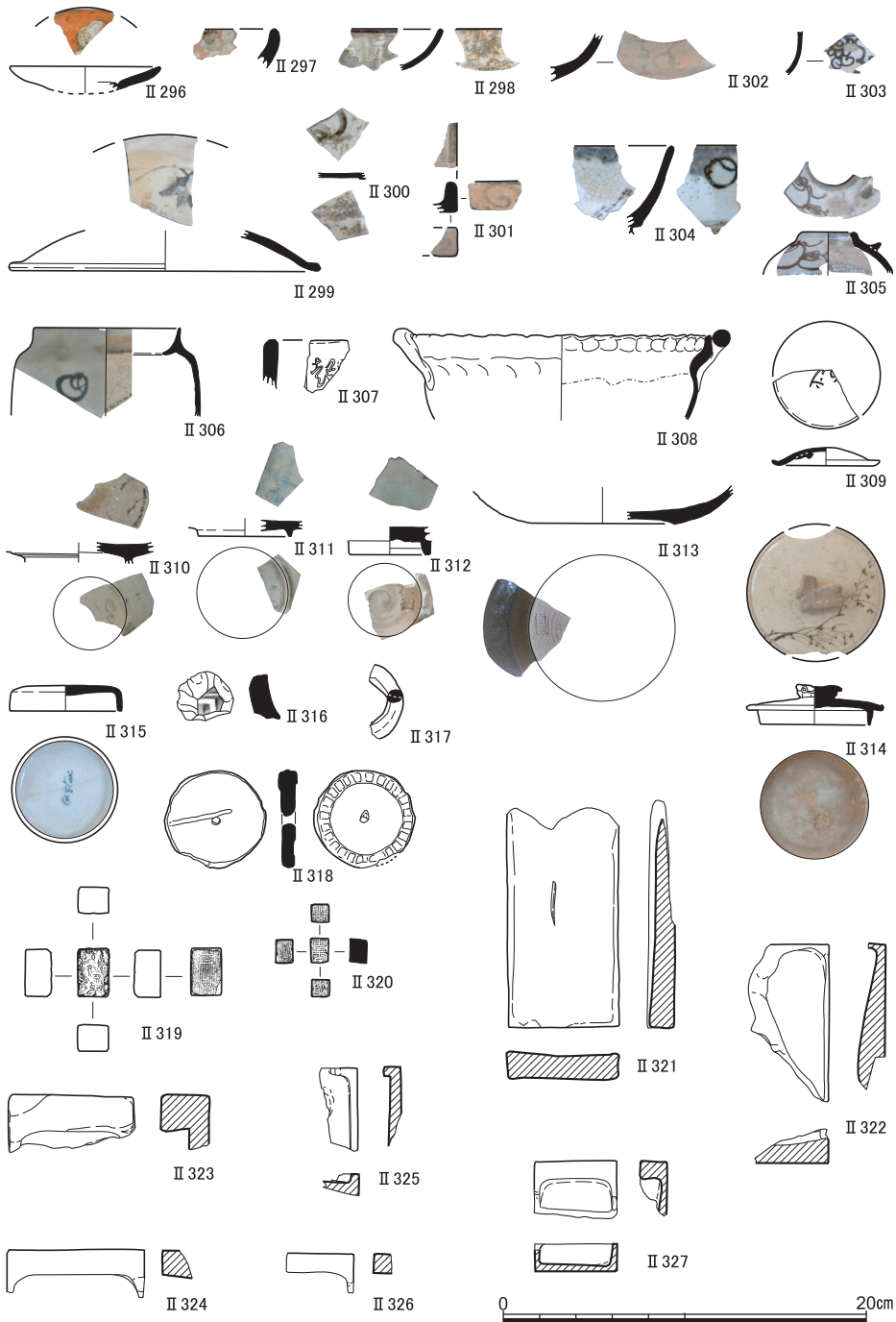


図29 灰褐色土出土遺物（Ⅱ296～Ⅱ301軟質施釉陶器，Ⅱ302～Ⅱ314陶器，Ⅱ315・Ⅱ316磁器，Ⅱ317トチン，Ⅱ318陶製品，Ⅱ319・Ⅱ320石製印，Ⅱ321～Ⅱ327硯）

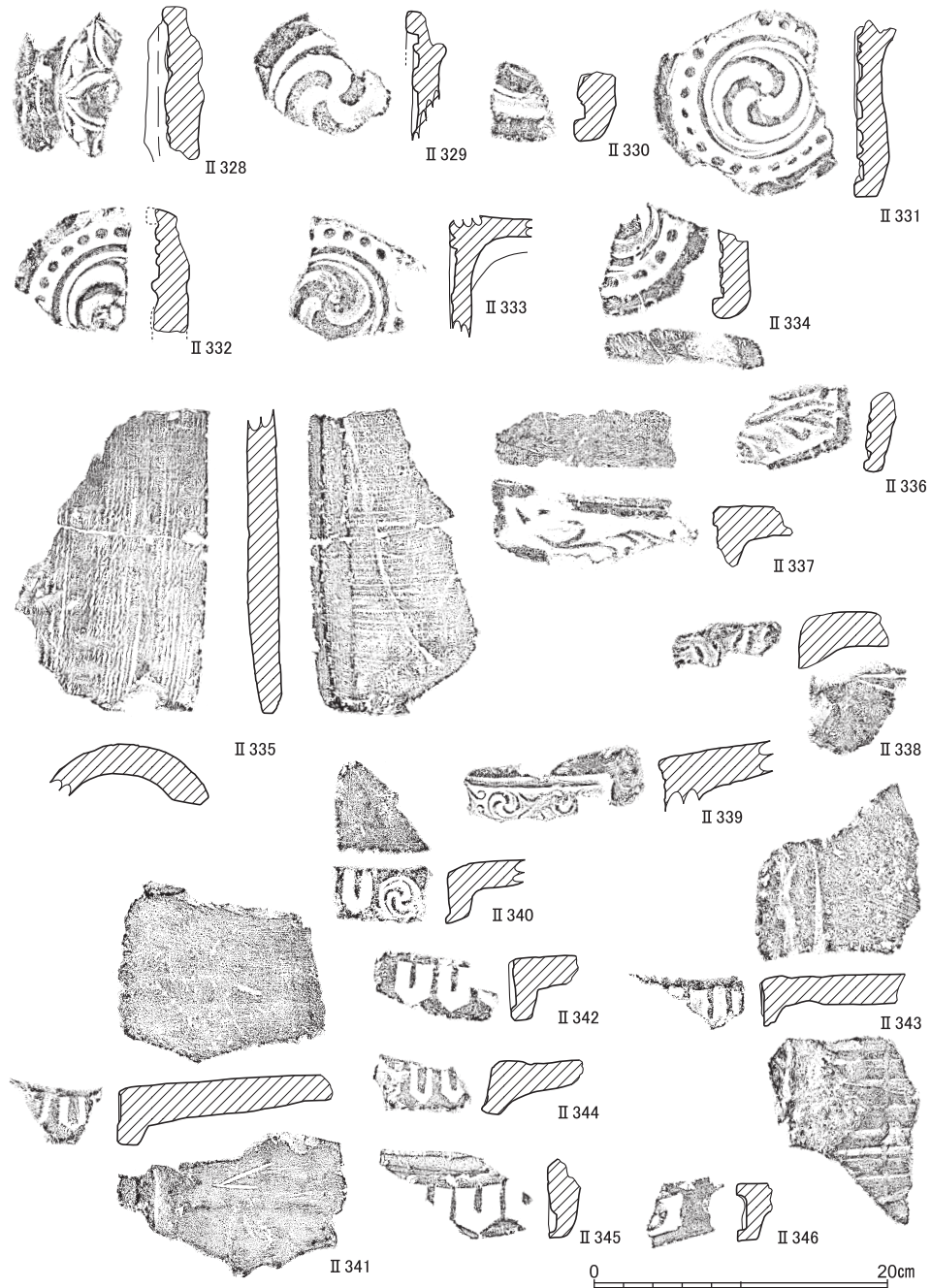


図30 瓦（II 328～II 334軒丸瓦，II 335丸瓦，II 336～II 345軒平瓦，II 346軒棧瓦）縮尺1/5

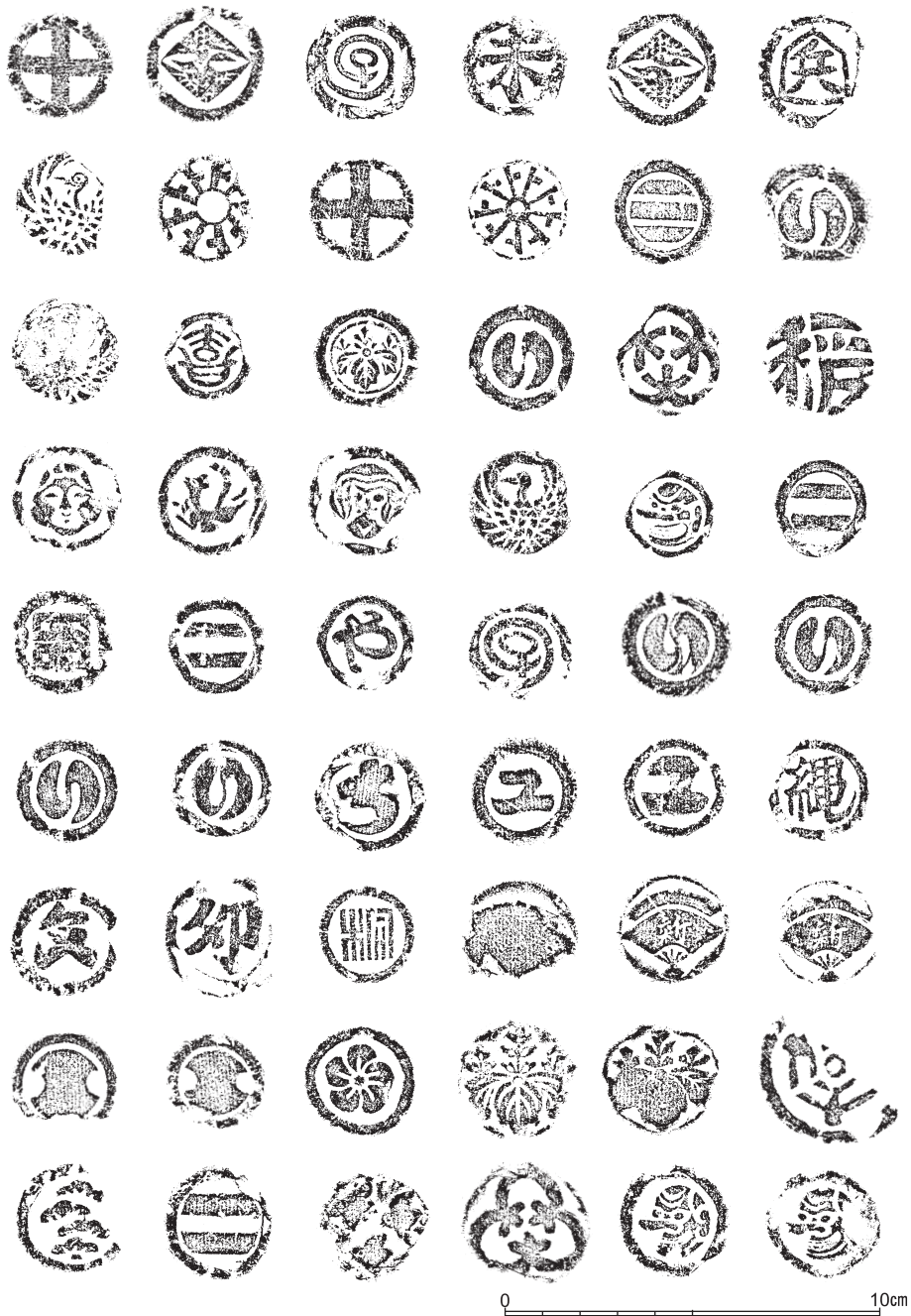


图31 泥面子(1) 縮尺1/2

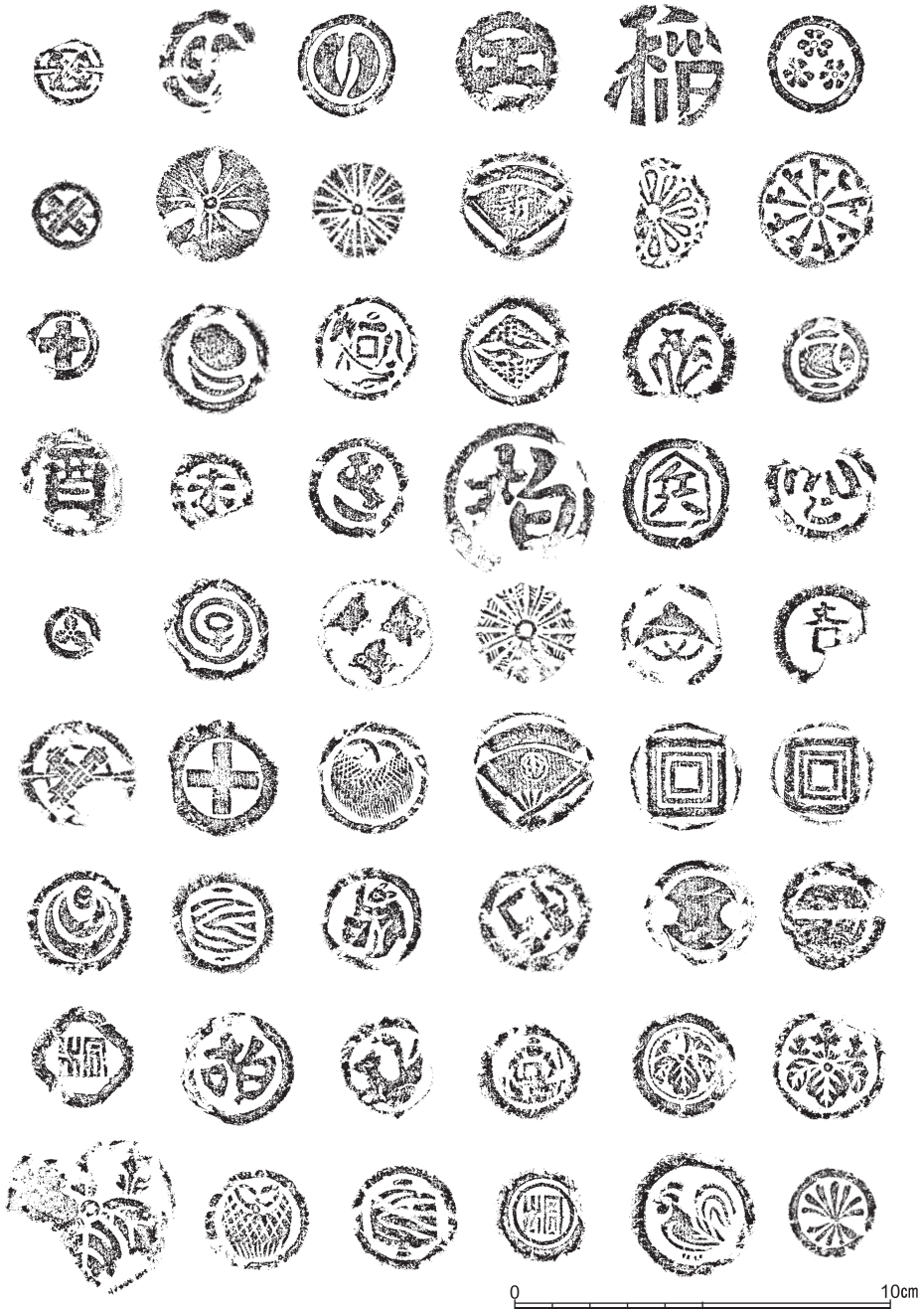


図32 泥面子(2) 縮尺1/2

5 小 結

(1) 堆積環境

自然地形 高野川系流路のもたらした水成堆積層である黄褐色砂群は、上面の標高が47mをはかる $Y = 1850 \sim 1860$ あたりが最も高く、それよりも東西は徐々に傾斜していく。また、調査区中央付近では、攪乱除去後に露出した黄褐色砂群の上面に、中近世の遺構の掘り込みが達していなかった。こうしたことから、調査区西辺の $Y = 1850$ 付近で確認された、近世1・2期の西落ち段差は、茶褐色土Ⅰの下位の黄褐色砂群の上面の標高の違いをおよそ踏襲していると思われる。すなわち、本調査区が本格的に開発され始める15世紀頃までの自然地形は、調査区中央に、およそ南北方向にはしる礫堤を母体とする高まりがあり、そこから東西にそれぞれ緩く傾斜していたと想定できる。そして後述するように、18世紀の土石流は、この礫堤を覆うことはなかった。

古代ないし中世の堆積物である黄褐色砂群は、高野川系流路の氾濫原が西へと徐々に移動していったことを示しているから、黄褐色砂群の堆積以降は、高野川系流路は調査区の西側を主に流れていたと考えるべきだろう。すると、この礫堤の東には、後背湿地状の窪地が形成されていたと想定できる。実際に、東壁で確認できる青灰色シルトや、暗灰色粘質土の基質となる粘土の堆積を認められるので、滞水域となっていたことがわかる。そして、この湿地堆積の上部の残存標高は、46m以下である。湿地の広がりについては、本調査区よりも南東に位置する278地点では、 $Y = 1940$ あたりで標高46.5mの高さに縄文時代の砂層が遺存しているから〔千葉ほか2007〕、そこまで及んでいた可能性もある。

青灰色シルトは、包含遺物を認められなかったので堆積年代は不明だが、その上位の暗灰色粘質土からは、15～16世紀の土師器が認められる。したがって、その年代には、この粘土堆積の湿地に人の手が加わり始めたことがうかがえる。そして、この暗灰色粘質土からは、13世紀ごろの土師器片も出土していることから、基質の粘土の堆積年代、ないしはその湿地帯への開発の先駆けが、その時期まで遡る可能性がある。

土石流 氾濫原の環境に黄褐色砂群の堆積をもたらした高野川系流路は、SE8の構築された14世紀までには、本調査区の外を流れていたが、18世紀には、高野川系流路の左岸を土石流が通過して、本調査区内にも及んだ。第2節で述べたように、調査区西辺では、土石流が及んだままの状態を保っている部分が多いと思われる(図12)。ここで確認できた土石流は、調査区南側攪乱のあたりでは、それ以前に造成された西落ち段差を超えて

東に及んだ痕跡は認められない。しかし、調査区東辺でも、木組み遺構S E11の上部にある拳大集石を構成する礫や、井戸S E13の上部に堆積している褐色砂礫Iは、時期を同じくする礫群である。

15～16世紀の井戸の上位に堆積する褐色砂礫Iでは、含まれる礫は最大で10cm程度で、西辺の土石流堆積に含まれる礫と同程度である。そして、18世紀の遺物包含層に上下を挟まれている拳大集石には、10～20cmの礫が目立つ中に陶磁器の破片も多く出土し、また、地点によっては礫のすき間に粘質土が入るところもあるものの、これも西辺の土石流堆積と同時期である。そこで、こうした状況証拠をつなぎ合わせてみると、土石流は、調査区中央の礫堤の東西に分岐して、標高が低く聖護院村の中心により近い東側に、大きく強い流れ、すなわち多くの土砂と大きめの礫をもたらした、と考えることもできる。

東壁際で検出された15～16世紀の井戸S E13は、直上は層厚30cmほどの褐色砂礫Iに覆われるが、その上位には、粘性のある茶褐色土や灰褐色土が1m以上の厚さで堆積している。そのすぐ南で検出されたS E12は、直上に茶褐色土や灰褐色土が1m以上の厚さで堆積している。ともに石組みの井戸でありながら、井筒は残っておらず、近辺にも井筒を構成したであろう礫の分布は認められなかった。こうしたことから、この2基の井戸は完全な削平を受けたことがわかる。褐色砂礫Iの砂礫をもたらしたのがこの土石流だとすれば、その分布域の中に掘立小屋のような建物などがもともと存在していたとしても、跡形もなく押し流されたことだろう。

ただし、土石流堆積の範囲を考えると、南東の278地点では土石流堆積物もその後片付けと思えるような集石も確認されてはいない。したがって、土石流といっても、聖護院村の北西部ほどの広がりにおさまるような局所的な現象だった可能性が高い。高野川系流路の、すぐ上流部での大きな礫堤が流出した程度のものであったのではないだろうか。

(2) 中近世の遺跡

中世の遺跡 中世の遺構は、いずれも削平を受けた14世紀の井戸1基と15～16世紀の井戸5基しか確認できなかったが、遺物は、近世の集石土坑埋土をはじめとして調査区一帯から数多く出土しており、輸入磁器も少なくない。出土した土師器で見ると1段撫で手法のものが多いから、遺構が物語るように、15～16世紀には本調査区一帯の空間が利用されていたことがわかる。その一方で、瓦が比較的まとまって出土したのは、14世紀に帰属するS E8のみであり、近世の遺構や包含層からさえも瓦の出土は少ない。

本調査区の周辺を見てみると、100m南東に位置する278地点では、逆に古代末期から14

小 結

世紀ごろまでの井戸や土坑が多く、15～16世紀には遺構密度も遺物量も大きく減少している〔千葉ほか2007〕。西に目を向けると、本調査区の100m南西に位置する19・39地点でも、護岸や井戸など、古代末期から14世紀ごろまでの活発な人間活動がうかがえるが、その後の土地利用は低調になる〔岡田・上原1977, 京大埋文研1981 a〕。つまり、本調査区と、東の278地点と西の19・39地点とは、ちょうど補完的な関係にあるといえる。ただし、瓦の出土を見ると、いずれの地点でも15～16世紀になって減少していることから、本調査区周辺は、居住域に含まれるような空間から、居住域から離れた田畑へ、と景観を変えていったことが考えられる。

近世の土地利用 18世紀には土石流に見舞われた。しかし、おそらく、その時の大量の礫を石垣の段差上に集めるように片付けて（＝拳大集石）、石垣の東辺を再び可耕地へと復興させたと思われる。拳大集石から出土した陶器片には、調査区中央に位置する方形の集石土坑S X 6から出土した中世の備前焼すり鉢の破片の一つと接合するものがあつた。接合はわずか一点であり、遺構の帰属時期とも異なる年代のものだが、この2つの遺構は、時期を同じくしてしかも性格も同じ集石である。本調査区の18世紀の集石がいずれも土石流堆積物の片付けに主に起因するものとすれば、そして、このすり鉢破片が、同じS X 6から出土した弥生土器底部や中世瓦と同じようにもたらされたとすれば、石の集積の仕方こそ異なるものの、土石流によってもたらされた礫の片付け行為が、調査区の東西で同時におこなわれていた可能性もある。

さて、少なくとも19世紀には、調査区の東西で、土地利用が大きく異なっていた。一辺15～30cm前後の方形ピットは調査区西辺でも東辺でも同様に認められるが、調査区東辺では、平面形が長楕円や三角形を呈する浅い鋤痕のようなピットや、甲子目状に連なる浅い溝群が認められたのに対し、西辺では、短冊状の浅い溝列や不整形の土坑が認められる。そして、第2節で触れたように、土質の東西での違いも顕著で、東辺では粘質土の堆積が厚く、西辺では砂質土があまり厚みをもたずに堆積している。とりわけ、東辺の東壁付近、すなわちS D 28と石垣を伴う東落ち段差の下位では、粘質土が厚さ1 m以上も堆積している。つまり、東辺には保水力があり西辺では透水性が高い、という環境にあったと言える。調査区の東西で異なる遺構・土質の性格に照らせば、調査区東辺では水田が、調査区西半では畑作が、それぞれ行われていたと思われる。

さらに、調査区西半を細かく見ると、Y = 1850あたりにある西落ち段差の下位においては、北側攪乱に近いあたりでは、土質を見ると、遺構面のベースは茶褐色土が分布せずに

黄褐色砂群となっており、遺構を見ると、短冊溝が分布しない代わりに井戸や廃棄土坑が存在する。それに対して、南側攪乱に近いあたりでは、土質を見ると、土石流堆積を間に挟むとはいえ基質が比較的細粒の茶褐色土が分布し、遺構を見ると、井戸や廃棄土坑がない代わりに短冊溝列が掘削されている。Y=1850あたりにある西落ち段差の上位では、細砂からシルトが比較的広く分布するX=920あたりでは方形ピットなどが群集するが、その北は地山が黄褐色砂群であるせいか、方形ピットもほとんどみられない。このように、畑地と思われる西辺でも、ベースとなる土層に応じて、耕作のあり方が異なっていたと思われる、それは作物の違いをも反映していたことだろう。

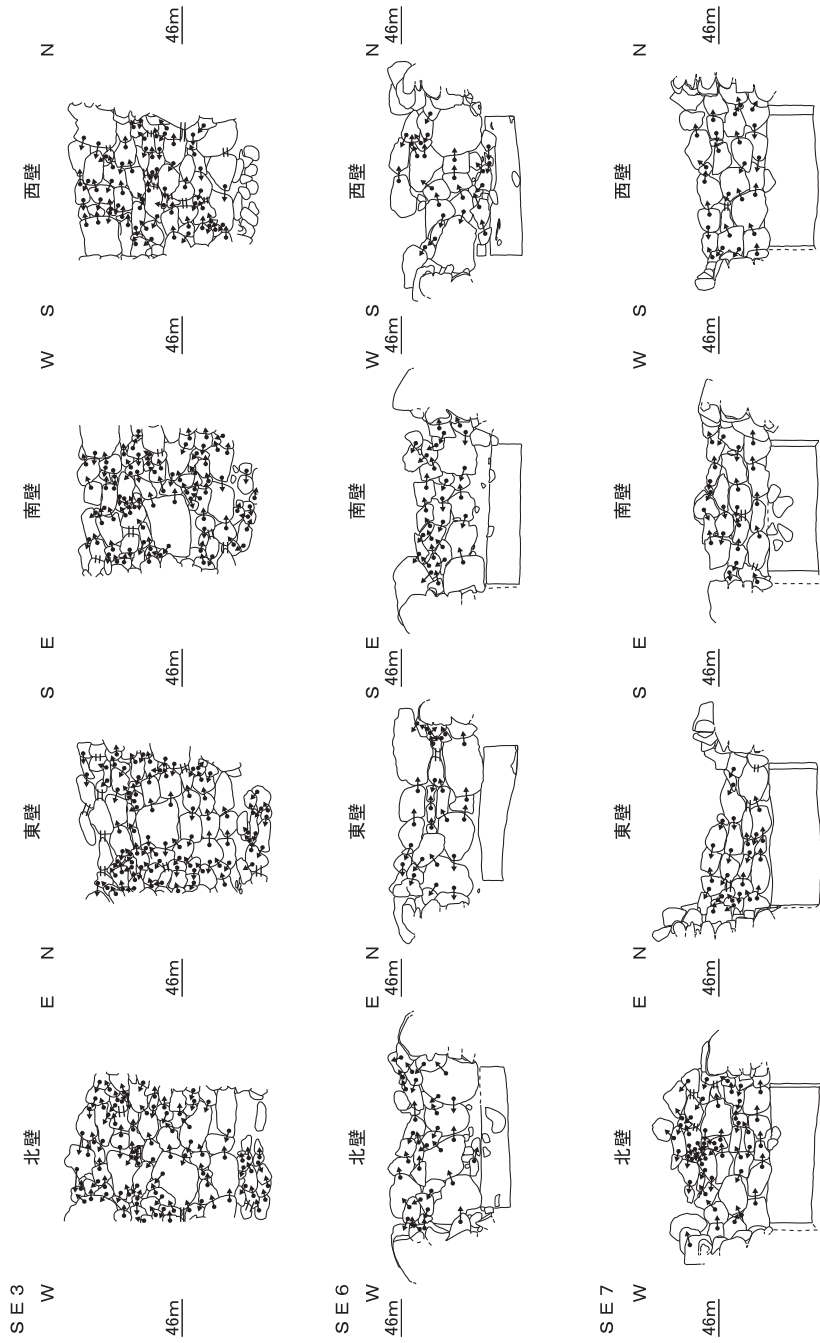
(3) 井戸や石垣の石組み

本調査区では、15～16世紀の井戸であるSE 3・6・7と、18世紀の井戸SE 10、そして19世紀の井戸SE 4には、石組みが残っていたので、それぞれについて、石の組み上げ順序を遡るように石を取り外した。中世の井戸SE 3・6・7は、井筒の直径が比較的大きかったので、木桶におよそ正対する角度で石組み四面の側面図(縮尺1/10)を作成することができた。そして、石組みの先後関係を側面図にメモしながら、組み上げ順序を記録した(図33)。近世のSE 4・10については、井筒の直径が小さかったので、石組みの側面図を作成できなかったが、そのかわりに、石組み上面から石を一点外す毎に記録写真を撮影することによって、石の組み上げ順序を記録した。SE 4では140カット、SE 10では327カットを、それぞれ撮影している。

石を組み上げた遺構として、本調査区では井戸のほかに、SD 28に伴う石垣がある。これについても、同様に、石の組み上げ順序を遡るように石を取り外していった。石垣については、井戸の調査とは異なって精度の高い実測図を作成しなかったが、簡単な記録写真を撮影して、その焼付紙に石組みの先後関係をメモしていった。

井戸にも石垣にも共通して言えるのは、井戸で言えば、螺旋階段を一気に上るかのようにならぬように一つ一つの礫を定方向回転で組み上げていくことはしない、石垣で言えば、一段ごとに全長の一端から他端までに礫を一つ一つ組み上げていくことはしない、ということである。すなわち、井戸の石組みでも石垣の石組みでも、少しずつ地点をずらしながら、ある程度の単位で数段を組み上げていき、その単位のまとまりによってそれぞれの石組みが構築されている。ただし、単位は、一つ一つを明瞭に抽出できるわけではない。

井戸の場合には、作業スペースを考慮すれば、一人の人間によって礫が配置されていったと考えるべきだが、石垣の場合には、必ずしも、一人の人間が地点を移動しながら構築



＝ 先後不明 → 左が先 ← 右が先

図33 井戸SE3・6・7の磔の組み上げ順序 縮尺1/50

した、と考えなくても良い。一段ごとに全長の一端から他端までに礫を一つ一つ組み上げていくことが確認されたならば、一人の作業による可能性が高まるが、今回はそうした状況にはなかった。

組み上げのおよその単位の中での傾向については、礫自体の大きさやかたちに規制されるので、著しい特徴を見出すことはできないが、SE3とSE6では、向かって左から右へと組み上げる一連の流れがやや目立つ。左側から礫を積んでいくことを考えれば、右利きの人が作業をおこなったのかもしれない。SE4とSE10では、円弧の4～5分の1程度を一つの単位としており、そのなかでは、一連の流れよりもむしろ、石の形状に応じて、右→左→中というような、中埋めをする積み方の方が目立つ。また、石垣では、一つの段の中では右から左ないしは左から右へとという一連の流れの存在をうかがえるが、5段ほど残存しているところでも、全ての段で同じ方向になるような状況ではなく、むしろ1段ないし2段毎に流れの向きが変わっているような感がある。

礫種についてみてみると、花崗岩を多用するSE6とSE7では、SE7の巨礫には平坦面が井筒の内側を向くようにして加工を施したことをうかがわせるものがあるが、明瞭な鑿痕などは、その他の礫も含めて確認できなかった。SE3では、花崗岩をほとんど用いず、また、花崗岩の配置に何らかの意味合いを想定することはできないうえ、その花崗岩も必ずしも平坦面が井筒の内側を向くようには意図されていない。近世のSE4・SE10と石垣では、堆積岩が多い。花崗岩がある場合でも、SE4の最下段を除けば加工を施したと思われるものは見つからなかった。

現地調査および整理作業は富井眞と笹川尚紀が担当し、磯谷敦子・下坂澄子・長尾玲・役重文範が、測量や出土資料の実測・復元などをおこなった。なお、堆積物観察について、増田富士雄氏（同志社大学）から貴重なご教示を賜りました。末尾ながら、記して感謝いたします。